

東海道名所圖會卷之四

目錄

櫻葉山	秋葉舊觀	多寶塔
白山祠	天瀨宮	織櫓
什寶	七龍	京丸
名產葛布	已等麻知神社	○日坂
身塚	子育観音	四郡橋
淡嶽	阿波波神社	掛川
菊阪	大井の駿遠兩國碑	○掛川
瀬戶	藤枝	○金
蓮生寺	那閑神社	○金
丸子	連歌師宗長古蹟	○金
古枯木	建穗神社	○金
繁山	用宗古城	○金
宇津山	田中城	初倉山
手藝	谷	○金
葛糸遺		○金
古蹟		○金

安部川
賤機山
清水
燒津神社
姥池
三保松原
額名川
清見瀉
清見閣
石深居二基
清見寺十景詩
古奴吳瀆
薩埵嶺
足利尊氏直義古戰場
由弁
蒲原古城
○蒲原

弥勒榮屋
名產白陪茶
草薙神社
御穗神社
有渡瀆
庵原
淨見寺
淨見禪寺
興津
岫寄
佛殿
山堂
龍虎圖
甲州身延山道
袖師浦
名產榮螺鮑
富士川

○駿府
漆間社
足久保觀音
久能山
羽衣松
廬寄
清見瀉
角田川
江尾
久能寺
梶原一門塚
麻機山
別雷社
竹齋
弓宿市
○江
磐城山
豊積神社
○富士川

富士川
源洞神社

曾我兄弟禿倉

慮所禿倉

古家川

二度齋

秋葉山
一鳥居

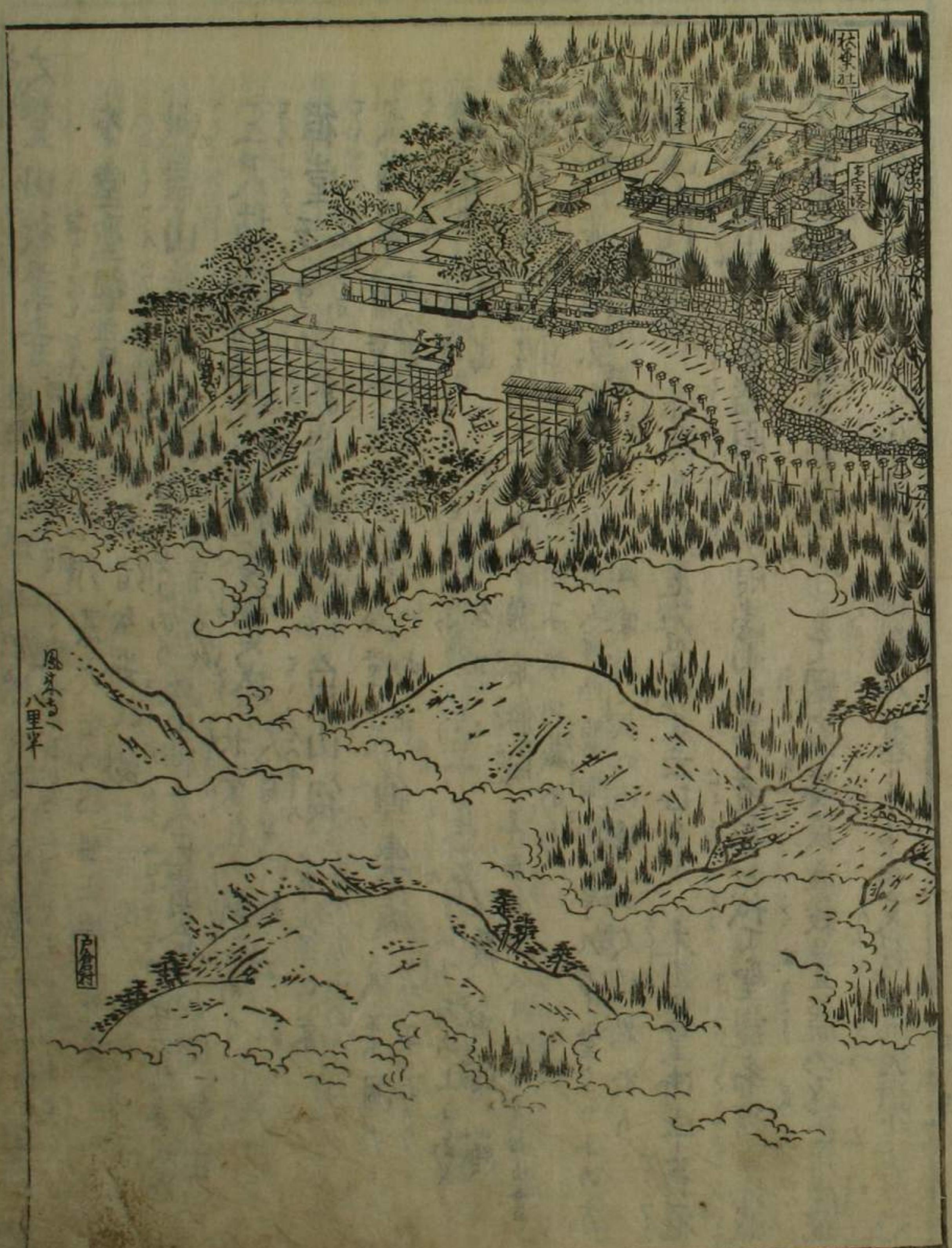


楓葉山社

やな
もえのやう



四ノ三



大登山秋葉寺

遠鷗周知郡大居村山崎ふあり御宗曹洞中興光體和尚

本堂聖觀音

同園久野村可曉齊不居モ天正年中再建

秋葉山權現社

本堂の側ふおり祭神大己貴命或弘延喜式内小國神社

三尺坊

高山護神と云多寶塔大日寺安ば

禪堂

本堂の基大士の化腸士勝軍地藏

三備宮

左の方より經堂右小佛多寶塔秋葉社の側

櫟鐵井

本堂うり八町許少くあり鐘樓経堂の傍右小佛

天備宮

左の方より經堂左小佛多寶塔秋葉社の

二鳥居

本堂うり町上に子安地藏あり一鳥居下村の上にあり

奥院

本尊不動明王傳教大師化龍頭山と号す本堂うり小の方

支那山れ寺

親と原に舊観見て遊ぶ云む一元正天皇御宇耆老

二年

小僧正行基諸幽巡りの時高山小登老杉と岱て聖觀音持軍地藏

十面大迦のそ像ニ軀以形奉して國家安民立穀豐饒の爲本院

苦創

一ノ小二佛安徳傳聞行基大士と文殊菩薩化身

天皇婆羅門尊者來朝相見の時權者ゆき半ちに事ハ南都東大寺
記傳小鮮ニ有寺の鎮守神ハ延喜式内小國神社と号一神躰大己貴
令あれと秋葉權現と称し一山護神小三尺坊と同社と祀る比叡人身
の附と信州の產也其母乃小觀音者深信ト普門品汝も半身百
卷小達の或夜大悲三十二身の中ゆて迦樓羅身汝現トゆふと見て
妊體一臨月小到く福德亦滿の相あり男子ハ誕ぞ父母神かくべ候ひ
成長小從ひ生家をき一め欲後園藏王堂十二坊れ中ニ三尺坊小住職を
此時不動ニ時法以り一七ヶ日小八千枚八千度八千度ハ八千度
狹れ一て満座の曉燒香の火烈々とて燃上モ鳥形兩翼小一
左右小劔索以持て互に現セ一を欲行法成就セうともひも一
心不觀念を忽煩惱業生死の苦患滅盡一て飛行自在の神通を
得る然るに一つの白狐出現セ一を欲行法成就セうともひも一
所小參候一て度生利益專小せんと誓ひ虚空不無行一ゆひ一

此秋葉山 小白狐と曰ふ者國名也て伏安住の嶺と号わす行基大士
の安一ゆゑ悲憫尊像立せしうばちよ禮拜供養へり其後行基
開基是老二年九十九年後て 嵩原天皇停宇 大同四年庚午
其後弘仁一年より諸國遊化して普く虎生利益せんて盡嶽靈
窟穴詣行一わゆゆる名山名蹟とらぐり其星宿相應りくて四百
六十餘年後 伏見院停宇 永仁二年八月中旬小奉れ秋葉山嶺小帰
峯ありもと太登山と號もと南海の汀より深宵攀登りて山は軸
峰五十町ともうけ標相の佛塔が到る入路十住十行十四向十地昇
進して修一峯う階級四十二位と候むる儀之上八町を四方四隅の菩薩
文殊普賢
觀音弥勒頂上の則八葉は蓮華蓋は併位と表もと又秋葉寺と號
もと上古此山不水乏少之ゆ寺傍歎氣鎮護の神社（祈誓）
ねれを二尺坊神勅は蒙りて又龍八部は招請一けれども應驗あり
て霹靂震雷一巣の中に西少の隅小あつて活泉涌出する時

人歡喜踊躍にて水中と見れを潔白の明珠二顆わつ是較龍領下の
寶玉也又蝦蟆坐て背面小蘂葉の二字次頂に懸び來る因縁寺以
秋葉と號はるゝの龍は玉の今小寺鎮とて寶庫小藏む蝦蟆は弔水
底か入く是之に加之の活泉也とくろ小寛永年中山姥坐りて
櫻と織それよりは水と傳織井と呼ぶ其織とも布に青銅十
足分副て住職が賜ひまれ又今小寺の寶鏡とて櫻布を住職乃
涅槃衣と號は實ふ不ふ織の金水也へ大旱の時雩それを乞
膏雨降る是龍神感應の名水也秋葉山畧傳記大概の
心一古緣祀舊祀等々亨祿天文の間甲州武田信玄が騒擾小
罹て兵燹れ爲小焼亡して只秋葉神社觀音堂経が遺り寶昌寺
僧携方々逃免しゆく今小な在て甲州乱坊の軍勢堂社が
焼拂ひんやて教父の火吹ひれども棟上より白水流れて火災が
免るあれらは應驗著一々を近年都鄙の未傍暑寒と燒りば

燐のぬく道ふはとひ秋葉講とて圓々縣々少て多くれ人數と密
月參る宿々れ泊札はと別れ路の標石わとひ石燒爐が建く
常夜と照れ勸善の祠や京師洛東聖護院村ふ近年經營ありて
紫庭の神行舊所とひされと初とて江戸大坂其外諸國小多
仰れ給人つとひて彼と申法筵のわと殊ふ山廿四日以内の
縁日とそ山筆を矢參れ御子度跋足參モ塙断寒若離龍筆を
斬端とつね山上山下系店の振ひ坂下村の旗龍戸倉の宿々
みるば神の靈驗をとべ一年毎例祭へ十一月十日より千六日小至
け夜せの時社頭の後方白砂か放て火鎮の神祭あり御神樂停陽
と拂う其時幕の未梢の御見松林並び拂えり七十五脂の神供
備ゆけ時小至く山嶺山麓震動もと申御久ト號云山神多く
あふ寄附と法樂歡喜の音と申名也れ坐遠近がりて山坊小
一茶籠り社およ敬礼もと申稻麻竹革のわと道中れ籠ひ

馬作鹿は繁昌駿發をとくふるは御神の靈驗をとくは中に才一あら義
刀杖の横難を免れ才二火災焼亡の危無免れ才三水淹沒
は難を免れこそ中古無火の時も軍卒多く換ト其餘煙ふとく社
頭の檜皮ぶ一火ふ燒せる時水害起りて勿ち消をこし今小遣うて才一
火伏慎護の神徳度生化益の方便海内一系小伝教せどとく事
三尺坊書籍上永仁二年八月十六日縁起ふのま
秋葉山道法上方本師より猪もと申東海道津浦の駅もと八里半
太野川あり吉田豊川の上へ大壁の省と屢々細川巣山より入る
三遠の國境也太平神源也石すひあひごと天龍の枝川の上あり也に
りて石す村の溪川也推草次く傍らけき篠多一それうげ石舗と
り山里小至れ風來寺もと申れまで八里半く右舗く申秋葉山の
社まで八十町の坂路也江戸の方もと申多安ト駕り時々洪水あひた
て入る處もと申れ四十ヶ瀬あり土人いれとくは川とくみ申
て入る處もと申れ四十ヶ瀬あり土人いれとくは川とくみ申
て入る處もと申れ四十ヶ瀬あり土人いれとくは川とくみ申
て入る處もと申れ四十ヶ瀬あり土人いれとくは川とくみ申



七龍國松山の巡遊縣山村より西南十町計二寺村の山中にす
京丸源在佐門尉といふ家より代の金巾子の冠緋誠の禮錦直無公所持

古證文書記一紙をうへ土人云むれい其苗孫もと云傳ふ

掛川

古證文書記一紙をうへ土人云むれい其苗孫もと云傳ふ
日坂まで至重井九町驛路餘ゆ云あふし今川刑部大浦氏直
日坂まで至重井九町驛路餘ゆ云あふし今川刑部大浦氏直
左石田与義勝をも慶城令を又三月高城へ名無城外を合戦を
是非くぬ等はくく後へよき河へ六月廿六日今川氏直掛川
の城と抱え事叶ひく遙れ生同困懸塚より船を寄く
小田原小浜河へ向す小賜也

それもく代の着底をうるく守護りゆく

富士起りありては被ふ掛け川やくぬれ者ふ秋のじう面 素孝節印

名産葛布 葛布はくふ際く呂服の市店小出も多ひ鞠襟甫御すれ
掛川の名産也下坂とつ銀治もは城下あり又鏡の波と波

已等乃麻知神社 延喜式内佐野郡小属也又一説云掛川城下海道
扇の裏町の小社次つとも又大仙寺村敵訪社云ひとも行れり分明を以

び所の少一あ小幡井川とくあり此社遙小篠根山とそ壁くづら

雄鷹の山とくさくも基石歩き里傍云ひく山神の櫛城龍宮へ山と
と頬ひくかども神ゆくゆりく龍神されと幅く大井川へ湖と

かくし雌鷹の山とくさくも神ゆくゆりく龍神されと幅く大井川へ湖と

圓んぐ山とくさくも基盤と投げて雄鷹の山とくさくも神ゆくゆりく龍神

鷹鷹二つの山と成りく今ふあり基石の歩きと雄く大井川へ湖と

ソシハと投げて雄鷹の山とくさくも神ゆくゆりく龍神

文德實錄云嘉祥二年七月遠江國事任社

三已代實錄云貞觀二年正月廿七日戊寅授遠江國

三已代實錄云貞觀二年正月廿七日戊寅授遠江國

三已代實錄云貞觀二年正月廿七日戊寅授遠江國

三已代實錄云貞觀二年正月廿七日戊寅授遠江國

三已代實錄云貞觀二年正月廿七日戊寅授遠江國

三已代實錄云貞觀二年正月廿七日戊寅授遠江國

家集

相模

名寄

相模

さうのまことゆの事へあつて其御事とぞくと
ひきうちひつけられ

ゆふすなうておなじまゆとゆきゆる神の事
奥應海起
山口といふ宿駅れを旅の間ふよけく通せり登原次第小一里
ゆふとまゆあおめりが事の役より社より移行に本地
お院佛院をまほらん薩摩をまほらん伊丹を神事ばわれ
ゆべと身もまほらん後身もまほらん輪山より
ともゑーくのまよもほん願ひよそ畢竟室寂乃法味
納受して眞實不虛の感應とされた万へ

署記
おとみゆれゆくろみて 大廣々大仙寺村の歟明神はと
みをまよせよせかまちみづかひよそあまくめん

入坂と號むて三町をうこみ八幡宮あり花表小様喰ひうる
先廣々

都筑ちとあおこりまく尼寺より初搗の葉これ
たもあふ神れ花表初とよあひそろも外よそど
あつアトヨリ表をまねて山をくわやよそ不喫のまく

天文四年三月冷泉大納言あくま武記

日坂山口ふいぬま兼任といふ社とよ一拜あ

大井川の河原とよてあまくまよいのあ作垣

冷泉島

和漢年代起云 欽明天皇十六年乙未二月大己貴神遠州周智郡

小現れ東ノ事任神社と當し周智郡

新坂或ひ西坂と記書く金屋寺モ里二十九町は所の名物

内辰紀云 い所の民アビ篠之妻の性遷の有軒と被ふゆふつて新坂

コロビ篠とく甚名あるもと或ひ葛の粉がすくく蒸餃と一豆の

粉小塙とねじて旅人ふまじん持の蕨餅たりとあつて其葛

餅とつ事はあつて諸侯ふ茂神次第く老芊灰得る

人もあくらむと

婆呼焦子婦喚供侍人鄙食在途中
懲誰教得西山餌馬首吹來餅餉風

羅山

日坂

江

佐
萩
中
山

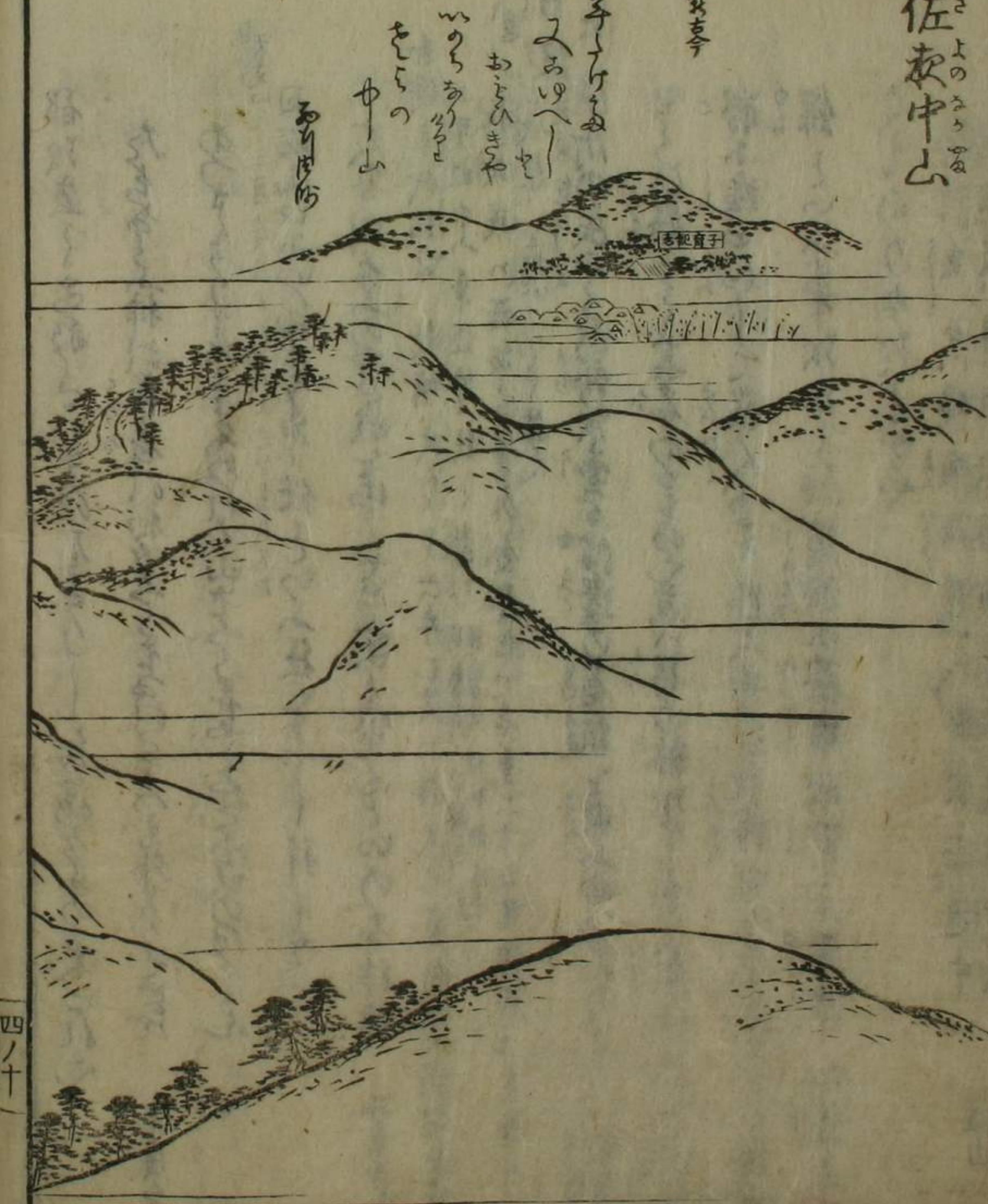
さ
よ
の
な
み
や

ま
ま
ま
ま
ま
ま

ま
ま
ま
ま
ま
ま

ま
ま
ま
ま
ま
ま

ま
ま
ま
ま
ま
ま



一四八一

ま
ま
ま
ま
ま
ま

ま
ま
ま
ま
ま
ま

ま
ま
ま
ま
ま
ま



佐
和中山

故の東小どひ佐和山故の中山の方を東海道筋に通じて東へと通り方角抄よへた。小坂の山西の廉は新坂と名づけ宗祇の小さな中山ありぬる。此よりの中山とす。宗祇の中納言師長公あ國の任より下りたり。時土民のさとみの中山とす。中古のせん達ぬてもさす。ふ薄れ。ゆき又源三位類故や作りゆく。中古のせん達ぬてもさす。ふ薄れ。ゆき又源三位類故の如きの長山とぞり。老翁よりの作り。一のうもさとみの中山と登。能く。此と云ふ。或云。雲能の。この。新坂。さりふくら。よしと。つとく。うひ。山遠江国。佐野郡。さよと。さよと。うひ。五音相通。うりを。接。ふ。小。此。沙。古。名。高。名。古。所。う。勅。機。古。能。多。古。今。東。能。の。沙。中。山。う。く。小。能。ー。う。人。と。ひ。初。な。人。紀。友。則。

古今東あ

うひ。の。沙。う。も。み。ー。う。人。と。ひ。初。な。人。紀。友。則。

千載

うひ。の。沙。う。も。み。ー。う。人。と。ひ。初。な。人。紀。友。則。

薪古

うひ。の。沙。う。も。み。ー。う。人。と。ひ。初。な。人。紀。友。則。

日 續後撰
古々の々が付と並へて月あぞちなる。古よ北中山
岩のの本あめーー次行志をておと御みと。古よ北中山
薪古

ひうのの本あめーー次行志をておと御みと。古よ北中山
岩のの本あめーー次行志をておと御みと。古よ北中山
薪古

新後撰
旅夜夕霜やまむかはやの中山ゆ一吹也

續後撰
旅宿見るさよの中山ありてそばに木すく。春水樓喜

續1
月待て猿轡ゆも夕客の通す。さよ乃中山

風雅
旅のすよりより山ふら。よ中に席も。さよ。すく。か。

新後撰
嵐れやも。う。の波をあふ。りて。嵐と。ひ。す。の。中山

藤原有良
旅のすよりより山ふら。よ中に席も。さよ。すく。か。

旅のすよりより山ふら。よ中に席も。さよ。すく。か。

旅のすよりより山ふら。よ中に席も。さよ。すく。か。

旅のすよりより山ふら。よ中に席も。さよ。すく。か。

旅のすよりより山ふら。よ中に席も。さよ。すく。か。

旅のすよりより山ふら。よ中に席も。さよ。すく。か。

旅のすよりより山ふら。よ中に席も。さよ。すく。か。

旅夜夕霜やまむかはやの中山ゆ一吹也

續後撰
旅宿見るさよの中山ありてそばに木すく。春水樓喜

續1
月待て猿轡ゆも夕客の通す。さよ乃中山

風雅
旅のすよりより山ふら。よ中に席も。さよ。すく。か。

新後撰
嵐れやも。う。の波をあふ。りて。嵐と。ひ。す。の。中山

藤原有良
旅のすよりより山ふら。よ中に席も。さよ。すく。か。

旅のすよりより山ふら。よ中に席も。さよ。すく。か。

旅のすよりより山ふら。よ中に席も。さよ。すく。か。

旅のすよりより山ふら。よ中に席も。さよ。すく。か。

旅のすよりより山ふら。よ中に席も。さよ。すく。か。

旅のすよりより山ふら。よ中に席も。さよ。すく。か。

旅のすよりより山ふら。よ中に席も。さよ。すく。か。

新後撰
旅夜夕霜やまむかはやの中山ゆ一吹也

續後撰
旅宿見るさよの中山ありてそばに木すく。春水樓喜

續1
月待て猿轡ゆも夕客の通す。さよ乃中山

風雅
旅のすよりより山ふら。よ中に席も。さよ。すく。か。

新後撰
嵐れやも。う。の波をあふ。りて。嵐と。ひ。す。の。中山

藤原有良
旅のすよりより山ふら。よ中に席も。さよ。すく。か。

旅のすよりより山ふら。よ中に席も。さよ。すく。か。

旅のすよりより山ふら。よ中に席も。さよ。すく。か。

旅のすよりより山ふら。よ中に席も。さよ。すく。か。

旅のすよりより山ふら。よ中に席も。さよ。すく。か。

旅のすよりより山ふら。よ中に席も。さよ。すく。か。

旅のすよりより山ふら。よ中に席も。さよ。すく。か。

旅のすよりより山ふら。よ中に席も。さよ。すく。か。

新後撰
旅夜夕霜やまむかはやの中山ゆ一吹也

續後撰
旅宿見るさよの中山ありてそばに木すく。春水樓喜

續1
月待て猿轡ゆも夕客の通す。さよ乃中山

風雅
旅のすよりより山ふら。よ中に席も。さよ。すく。か。

新後撰
嵐れやも。う。の波をあふ。りて。嵐と。ひ。す。の。中山

藤原有良
旅のすよりより山ふら。よ中に席も。さよ。すく。か。

旅のすよりより山ふら。よ中に席も。さよ。すく。か。

旅のすよりより山ふら。よ中に席も。さよ。すく。か。

旅のすよりより山ふら。よ中に席も。さよ。すく。か。

旅のすよりより山ふら。よ中に席も。さよ。すく。か。

旅のすよりより山ふら。よ中に席も。さよ。すく。か。

旅のすよりより山ふら。よ中に席も。さよ。すく。か。

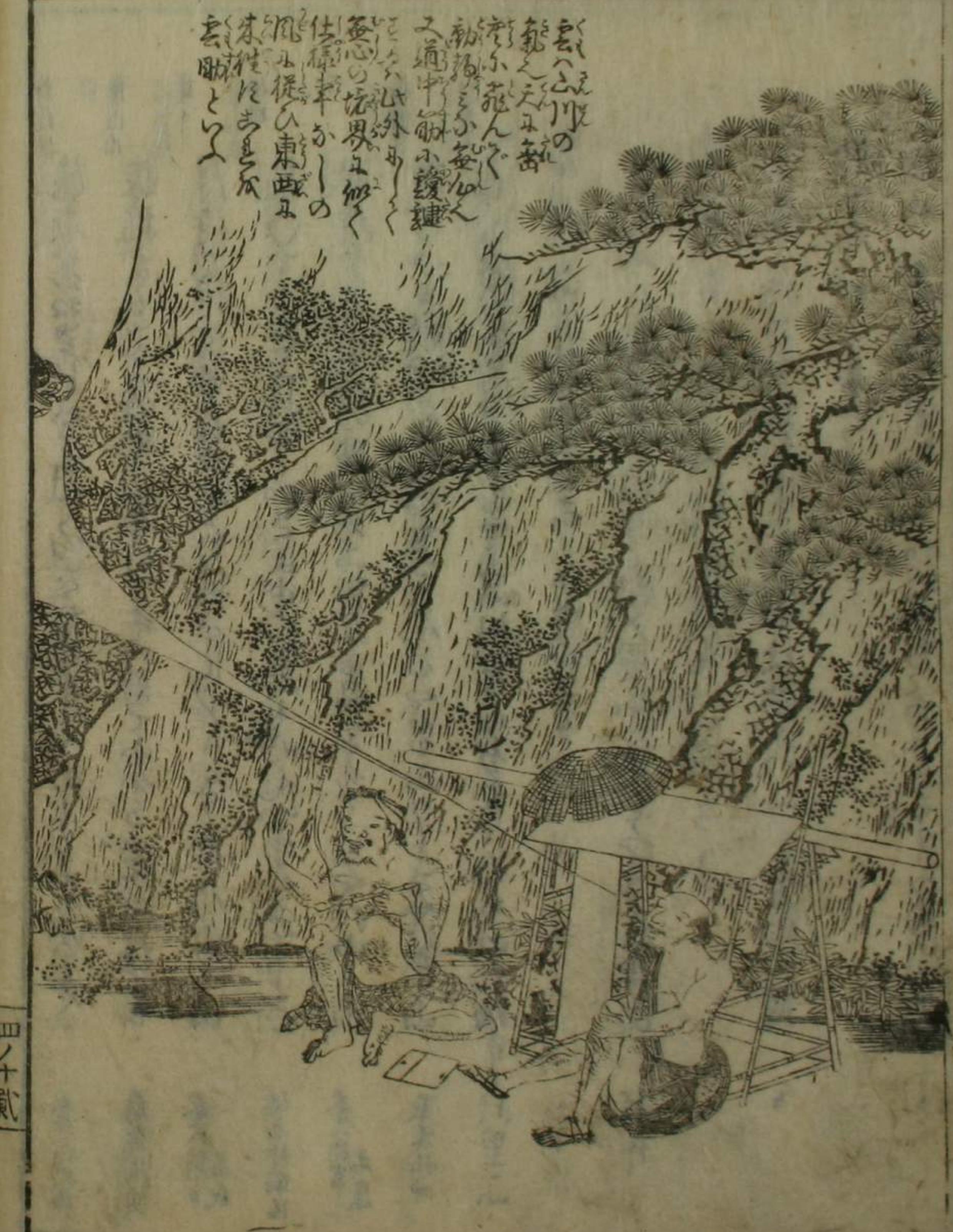
旅のすよりより山ふら。よ中に席も。さよ。すく。か。

銅脈

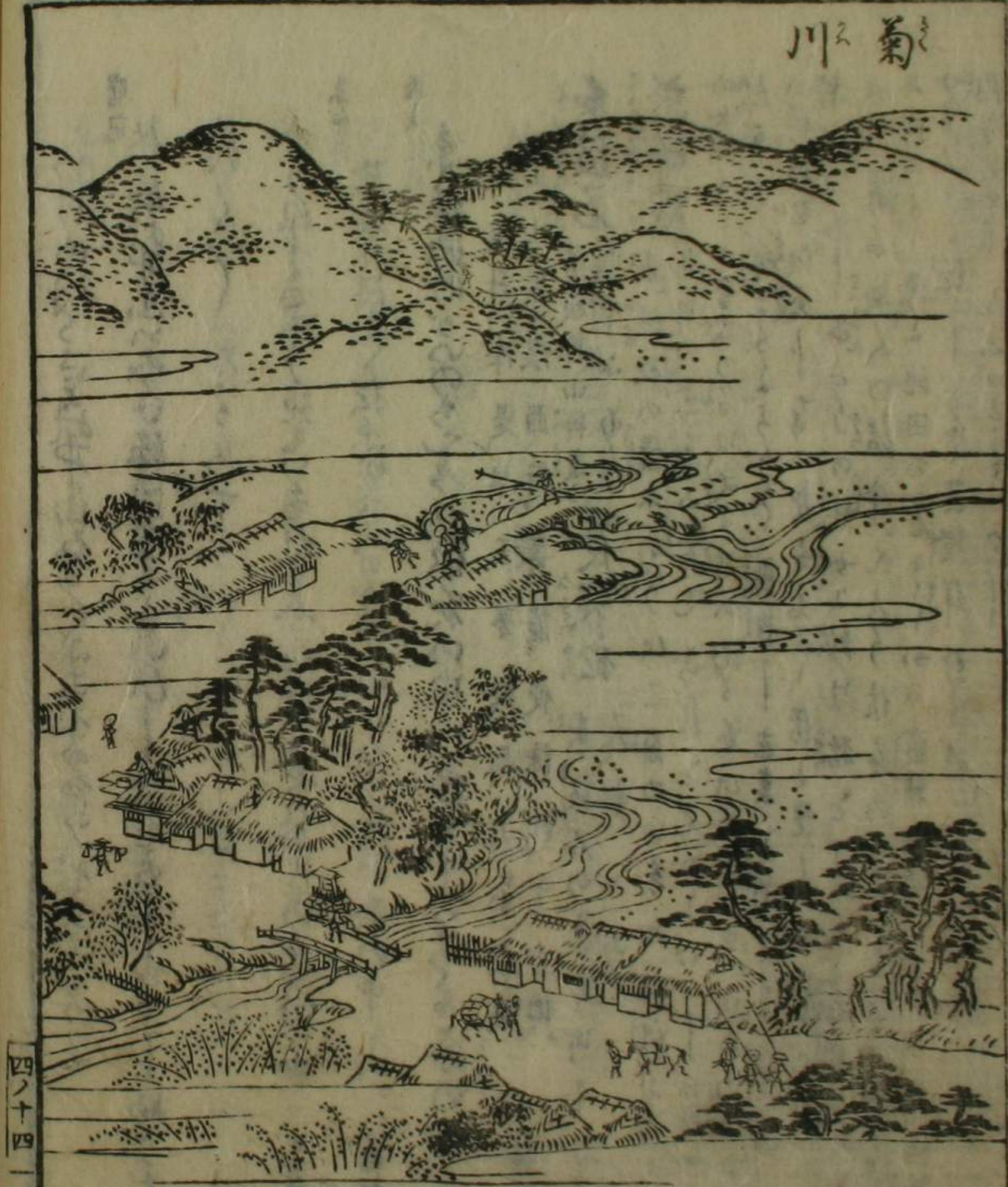


雲助行

雲助是何者更非
雲助兒尋昔元歷
歷如何今此矣一
朝蒙勸當十年受
艱難踏鹽體能固
至秋肥每寒玄古
餅追咽坂東酒流
身難瘦我非病雖
壯唯是貧憊壞肚
生馬賄夜宿建念
寺月當勝肩忘偶
難一盃受未見在
所松草謂吾無舍
幕天坐太平一本
有竹於萬里可
橫行



菊川



四ノ十四



菊の島
狐城
6月
信玄
准々

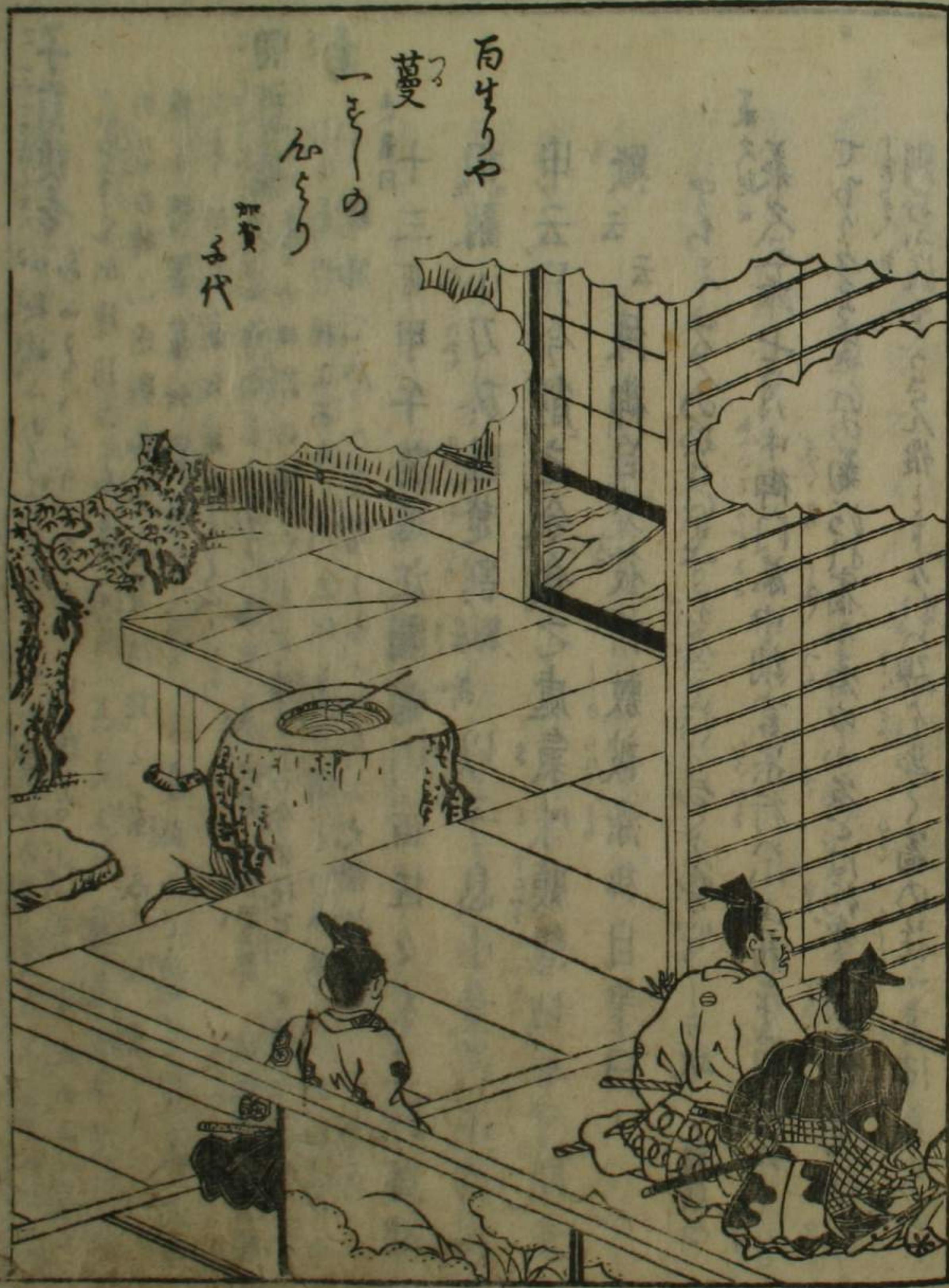
菊川宿

浪速春泉画

中門宗行より承る
古れ小猿金石捕れ
東小下りの舟は菊川宿
を菊水の下流す
故に近き菊川の多景
令と漁とといへ村句と
ちの様子小書遺され
一牛高見足見、うり
の晋の屋、外壁
信、三都公
毅、比定公



四十九



五代

子育親吉

小姓嶋ふあり久あ寺とひづ直の草堂に子龍の由織

天子すじは陵内小石表あく其文云慶長五年園原

の役の時山内對馬守一豊は地より至る亭宮

園初將軍家政饗應一もく一遺跡へと篤を迎奉之明

九年七月石表久建るとそへ

菊

四郡橋久志寺の東より奥園秦原郡佐野郡城飼郡山名郡

等の四郡の境しとぞ接する古今の様どりと稱もあべー

菊川菊川村より川上坂菊ヶ瀬とひき川村ひーの

菊川駿場今へ立場とくらば所ふえ根飯沼今ふあく

東屋日

十三日甲午於遠江國菊川宿佐々木三郎盛綱

相副小刀於鞋楚割

割

以子息小童送進御宿

申云只今削之令食之處氣味頗懇切早可聞食

歟

云殊御自愛彼折敷被染御自筆曰

すちえある人の取扱もすを度せりかく心こう肌

頼朝々

系文記云
嘉永二年七月中御門家納言宗行ハ小山新庄門尉具一來てひりなが遠近の菊川宿小着ゆか交とばんと向夕も菊のとや

たまむへ

則ふ小瀧さがさん後トヤクレバ硯乞歩く宿の柱小書はあゆ

光行記

昔南陽縣之菊水汲下流延齡

今東海道之菊川宿西岸亡命

菊川と云承ゆくふ一義久之秋のは中御門中納言宗行

家をくく者有く妻下られぬふけ宿小泊りよきを首へあ湯縣

み菊水下流を汲み敵はぶ今へ東海道乃菊川のあせまふ宿して

令がうるをやむ家を障子ふ書れたりると字をとせたれあつれ

ゆその家とあらに火のあらふ事せられてれとゆと拂ひぬトヤ

者あく今ひのかぎりとくのゆとくらん形見えんはくく成ふ

くくはくみにせのゆとくくふくうとくまわん

老行

胡馬記

老はれく日鳴翅さぐりねれは某食をゆくあんぐく老

菊川の高ふとありぬ或家のうへ故不故中御門中納言宗行

書付られず彼南陽縣の菊水下流汲み敵をのばす東海道の

菊の西界ふやうて今と全くとがふとあられみてかがゆれ

其身を累葉乃賢枝不生れ其宮の表門のそとに階ふ昇る雲の入
の月華より冠のからりぬましに仙洞の花のひや錦の袖の色あゆ
共の身をうる紫かふあまうて財と金と匂ひ一びへそれとせざ
してちうれもよこぐひ遠きもうびましもくらうむめ見えむとんとくよ
べきともあきましやちう最も久こと中旬之下風あれく海内
の浪こうきき國乱の亂將も花城よりみよし合戦の兵士も夷
國ようやく暴雷玄云が害りて日月光がれかれ軍艦船を
うごくそら銃威とゆく 下畧

太平記俊基東征後基朝後再び関東下向あつて時省の名は關東が菊川とすま

後基朝後再び関東下向あつて時省の名は關東が菊川とすま
系えば軍に先鋒の院宣書をひゝ罪ふよつて關東を出でて行省を
背南陽縣菊水といふ四句歌をうし年幼びひ生て遠きむづれ
美術今我身のよみうれやいとく故さん一首せ歌と書け植木書

いふしむくならやひまく川の口一流ふ身をやろん 俊基朝臣

按ふ東鑑ふ院宣紙書をひゝも先鋒をもこれども菊川をて四句歌をうし
中侍門宗行をほりを平記の號謹をひゝ先の起ふ菊川の家
燐と書一も承久より北二年後之年正月も又貞應院主把ふ四
句の事書一も後三年の後も後人勸考して是非と云ふと半也

菊阪 男原村ふ菊形の名石あり 牧原 初ハ後訪原とゆりえ正のはく牧原と改む

牧原 初ハ後訪原とゆりえ正のはく牧原と改む
藤坊原古城 牧原とゆりえ城も天正元年武田左馬助信豊
小泉隼人忠次公並同年七月侵ねよ攻らる兩人より
防ぐて名と得て金谷坂の奥儀ふとくも繩りふとう又は攻人ふ
戸田左門大津土左衛門などはく御をなれど室賀小泉
ちくし郡一城と出く 固固小山の城ふ籠きよ築
固くして名と得て金谷坂の奥儀ふとくも繩りふとう又は攻人ふ
野の度と方を理作城の弘
天守の躰など縱然く
初倉山 金谷坂の上方をり山の奥の方ふ初倉里あり金谷坂を
の風氣の佳境なり 富士山を遥ふとく



穿一や々々ぬるひくワのへひかへゆきくとくのやいとをも
取うちのそたんおもむけとへたうりゆ

さひ生る都のこもくちゆわいじくの石井まも及一 乃井
えりへうもの所はゆうねる奥より大井川と見ゆべーそれ
ちるくことか絶きられぬち不一とぢゆび流れ別れもは
の風ともよ入ちひるふせう中へコムアセ乃くう
もよめりあすへく寛ゆきかみのすみぢ見てと後くなされん
龍田にゆくひどもあづへやすくつれ

日教すきひのあそれ大井川とくね水とふくに色る 乃井
佐基あ所ゆづり 大堰のとさかを都ふあく一名称く龜山殿の行幸れ嵐の
山花盛り龍頭鷲首の船ふ兼荷歌管絃の宴小侍一坐も
今ハ再び又忽ての爰と歲ねとありひばりゆ

東氏紀行
旅や湖水とひだり大井川人の心せ座もぬはぬ

澤庵和甫

四二十一

駿遠兩國燭 大井川の燭へ遠州半ト駿州へ近シ下瀬西の方へ駆て
丙辰紀行
大堰の駿のと遠江との燭へ明日香川をく称と霖雨を瀬懸の
る草たびくかれればあれ山の岩が流れて鳩田の驛の原の中にある半も
あり西のゆふ流く金谷の山半も半もあり又一まちの丈のとからて奈
山石が流モ半もありあまく升枝流とからて一里をくらう間ふつう半
をあくこれをしめへ徒杜櫻梁りゆうがてに少従来の人馬のり
廻とあくされば金谷ふ待もあく鳩田小やくあるもあく鳩田小やくある
もあく辛ふドて向ひの巣半至るもあく鳩田金谷の民ちのう家とたゞひゆる
れども旅客の裏浴むきぼりゆく水浴水とほく賣炭灰翁を卓夜ふにて半は寒江
を待がくとゆ水は家以流へ田と換ふゆふ防略河使防葛野の使役
ゑれへむへたま半も口へとあくひ出ざんや

羅山

○尋常掲屬心過腰叱馬呼奴魂欲銷
來往就中何處苦無舟筏復無橋
○海道奔流第一川鹽輿昇載擔夫肩
洛西大井雖同稱此不省荷彼有船

大井川



大井川

續之圖

旅客馮陵慎涉過
橫天湍瀨急頽波
水光倒走中山樹
石勢轟流大堰川
決口年年沈白馬
防堤處處卧蒼蛇
早知夏后行無事
安得成功濟世多



四九二



内の上り
宝耶

蘿岩

乙卯仲夏從東關
歸路憩鳴山驛長
太保氏家主金鑄
大井川渡其苦忘
殆厚矣

きしを越大堰川を東海道第一の急流れ大いふして薰風からみがひ
 湧く穴所吹ぬればあらぬるやうへう舟をくねぬく橋無ふしてゆま
 わくや鳴田金谷れ川越所小立寄てゆあ川の定先をみて其債がほに
 剥肩とちくく渡下小船さうむ運臺肩車かくめあわて交易の賈人
 京毛を吾妻下を伊勢まつり富士佐を八人衆の臺ふ赤くれ又く肩
 車かく涉をわく相撲れ閑取り人と雇び自鬼裸ふ腰て土俵入の如く
 ひもあう水勢ちかくや劣モクン波を左別れち鄉相の雲客烈
 園の諸侯駕け臺小居て多く戎走せりて昇波し水邊の傭まいあ後
 お川の寂しき小波丁へ弱里みうき風も夏のと貸小入ひうれゆ
 羅山子のよく已ざ柔の戸へ流されとも首とけの備銭を納して
 月雨の水か威と威してうの瀬の蔬と舞く所く小妻は鳴田金谷の渡下都
 て七百人で霖雨を止してみどり庵一宿を向止まく東西の驛中所

やくまでくうり一驛二宿も跡へ處りて水れぬると侍もあり又通尾より
 游きて筋枝へ歩きもありかねば乃先小安郡川富士川酒匂馬入六
 郷多どく川々ありみるあれ小准べ一淮南子小水神坂天皇と云
 又水伯ともいふむへとうけのふ至つて接返まよ半れ旅人もあれ
 神の機縫紙獻くあるこひまねぐべ一後白河法皇の御宿
 鴨のれ水と雙六の塞くもや朕がもと偽ふ修形くばと作せられ
 も同日の論とぞやられど

鳴田

城

阿風雨頻來宿鳴田家園万里思茫然

山寄闇齋

通宵漏却斯様滴坐到天明不作賦

東北行

岩はくまくうはゆる奈井初生をおぞみ
 藤枝まく武里八町は宿小大井明神くまは所の生土神あり例祭
 九月十五日あのり御村御旅所と
 須戸前田より里許先かられ名妙ふ西刀と書いて益頭郡小入く
 今ハ志太郡もん海をの川と嶺戸川とくび川の山
 嶺戸山とくぶ又はやくふ
 嶺戸山とくぶ又はやくふ
 徒行記を堂あり

富士紀り

堯基法印

名物深飯

據はざめ小判形小肴干乾

藤枝

岡部までま里丸町山驛中花御志太郡右側ハ益頭郡也

風土記云大寶二年更為新驛云山宿鱗魚多

富士紀り

妻とま川をさかにたれもみどりのとあるや松井友枝の里

泰基雅経

青一薛縁一蘿恰好述

藤枝村一裡歎吾猶

闇齊

田中城

信蕃

同一年五月三日遠州淡松らむ攻

寺流云むる無谷次島道實親族久下直方と家督争ひ伊豆の走湯山小登り仲間入とそれらう上路
廉倉次通電伊豆の走湯山小登り仲間入とそれらう上路
して黒谷の法然上人の弟子と出家蓮生法師とあつた先
故々黒谷へゆるをもく山友枝の驛ゆく宿其夜蓮生
法師宿のゆうどふ云され故鄉へゆく又上洛まで儀をメニ備用
しゆくがつふ昂其質おとく念佛十遍於行けとす

蓮生寺

時ちぎく延暦一月の舊跡と云ふ

寺流云むる無谷次島道實親族久下直方と家督争ひ伊豆の走湯山小登り仲間入とそれらう上路
廉倉次通電伊豆の走湯山小登り仲間入とそれらう上路
して黒谷の法然上人の弟子と出家蓮生法師とあつた先
故々黒谷へゆるをもく山友枝の驛ゆく宿其夜蓮生
法師宿のゆうどふ云され故鄉へゆく又上洛まで儀をメニ備用
しゆくがつふ昂其質おとく念佛十遍於行けとす

固部

駿

家集

子名書

病とてひそばとせんとおさえてさうふせううの山

素

法印定園

本大納言

度家

やくもくおほへかけれとおも乃あひの酒をうり枯ふた

れ

本儀五相

海王

名産
瀬戸深飯



那須の山は、その山の名をもつて、山の名をもつて、それひいきと
さうなるふ處すと風へくも、ひたアテテとせれまくる。
根ふきもうすきなよとにさむくあひの

あれそこのまのまおけりと思ひたれによひてあけ　ま行
暁記

岡部の里に櫻一本咲るがるく

あさきあけとあらわう一毛とれ枝はすとみちゆるん

美度郷

宇津山

那閑神社益頭郡當日村小ゆり　岡部うきとし里井南
延喜式肉今土人虚空藏と称いのまき
宇津山岡部の谷崩十石坂谷原里和名抄肉屋郡有度郡とあり今安倍
郡小属十石坂谷原攻の時解勅功あつて西行の妻妻伴と
千手觀音碑豊太閤小由原攻の時解勅功あつて西行の妻妻伴と
領今み傳來一ノ家室と
鳴細道宇津の山ふゆ海道より右の方小狭道ありされ古の
所の者業者武人業内者と
業者業者二人縫衣既に至る御前御前ふゆく篠原ふゆく篠原御前
中通とがる茶木被
小路小路
所くわくく御前御前と御前御前

支宇津山鳴細道や勢船小舟くふり下う其名高く古跡多一上方
よりまことに至る山は岡部山驛より海道を里許りあ湯谷口陥れ下ど
所ありて是れ鼻取堆藏堂の向を望然壁権現の下れ御前右近方入る
より道細くまづらき渓川ありて源流右ふ源左ふつれく紅葉橋立つて
坂路坂路あれをつづく道細く山深くして幽寂さう茅草を秋萩篠竹
生長りて蔓蘿蔓蘿がづく足小屋の薔薇荆棘被と閉く歩く
二人のゆきの古跡古跡と薦刈く次を小走る山路峠へく
枝ともちくふりふりたつてか所ありて神社平とつむり社あり
一古蹟古蹟と教ゆ按ざる小驗の風土記小宇津谷本原神社
仁德天皇紀七年乙卯解祭解祭や云あひ神社の古跡古跡古跡
奥奥

とこふきくはの社は現みと爰ふも人々のあへ
並木
其上方に猫石とふわう古ね六七株は法小猫は卧る形ふね方亘嚴西
それうち又あるに御頂嶺御頂嶺とあがへき所小歩く山郭依りて伐木代

意の山をうかぐとて實を以て實小篠宿が桃花源小至のぼりあつむせう

東小篠の坂路より嶺一里眞山地として階止がてもぐくをえと
静小篠の坂路より嶺一里眞山地として階止がてもぐくをえと
かへて候下に遂小宇は各嶺のあき十面子は名ねの茶店乃傍

伊勢物語云

の

なづる橋とて北橋の東丸小牛すら是本海道も初れ湯谷口より

け所まで道法を重ふ足らずとへりあれ伏見細道といふ

新喜業玉経は
あるがからう山の山あひうり、あも爰ゆとくふわを安うう
玄旨云古註ふげもり高僧正遍昭とてう高流あく用モ多く便宣
あくべーとや發ふと人ふ遊ぬかりうりうりはらくる所あるもと
かのへりと傳成鄉もはやまみだ
廢

日 郁也ととやまとうの山ゆのあもくふほこの下みち 家隆朝臣

日 神ゆりも月かくれとく矣とくはくとくとくの山ゆのあもくふほこの下みち 定家

日 納みかくじのまつりとくとくの山ゆのあもくふほこの下みち 晴長明

新拾葉 及後あと駒一とくとくの山ゆのあもくふほこの下みち 妻義雅経

新拾葉 あじ吹高跡のまとくとくとくの山ゆのあもくふほこの下みち 俊成

新拾葉 里までかくとくの山ゆのあもくふほこの下みち 俊成

新拾葉 あくとくとくの山ゆのあもくふほこの下みち 俊成

新拾葉 あくとくとくの山ゆのあもくふほこの下みち 俊成

日 郁也とひもあれ神舟のふあんうの中山 俊成

従三位高貴

新拾葉 たおほ富士山のあらんとあつ夜ふくうは一時あくくもう
宇はの山とあくくもう

新拾葉 あくとくとくの山ゆのあもくふほこの下みち 俊成

新拾葉 あくとくとくの山ゆのあもくふほこの下みち 俊成

日 郁也とひもあれ神舟のふあんうの中山 俊成

従三位高貴

新拾葉 たおほ富士山のあらんとあつ夜ふくうは一時あくくもう
宇はの山とあくくもう

新拾葉 あくとくとくの山ゆのあもくふほこの下みち 俊成

新拾葉 あくとくとくの山ゆのあもくふほこの下みち 俊成

日 郁也とひもあれ神舟のふあんうの中山 俊成

従三位高貴

宇津山
つるさん

葛細路
つるのそとじゆ





玉葉
あけむゆ
萬葉相
あ葉
ふうけ秋ある
うほの山あえ
中務宗室親王



信生法師 そのよりくのは風のきがまうたうの山れあふ
歌と書つてくわづる後柱う身はうかれも都ふかうのう
竹くづみのうがくともふとくはくはく

う木れ山現すとさんゆうと爰とみよもやの臻外ん

猿はりかひく月せり木もひひもとよばの山守

宇津の山をみゆくとくさむとづの考れ細道

猿はり爰お幾わきちる花のうはくもはうた宇津の山嵐

ちくらくもくわきあい波がう川筋ひとぎれやうの山川

うはの山をみゆくとくさむとづの考れ細道

うふしーの山をもとぞんせんせんすく通うとうだみも

うふしーの山をもとぞんせんせんすく通うとうだみも

あ備といえどもあみ山むことかとくやくのほどとはれどこゆ

山中少許の里かぬてはまちもろにまきれりと
なれてば山小庵と名びはく故多は年月と送るべくとこ
首版齊ヶ首陽の室へ入へ猶ニ喪れよしとさう許由が顛水の
月かをととあづら一瓢れ器とのまゝとひそひれわむ
ゆく珠々すつたてるよそぐとアヒ紫ありやざくさあまくも
あひ本ぐたるよぬう身と孤山をあく一せうこにやどへてかね
津域は矣の外ふもやうひどもくくく表ふをがぞー
せばひとふかれがくやもれりや山毛の住家をては 光行
ひ居乃わくう參宿遠うじ跡とづふ原よゆく大なる卒放婆を年
経ふけふとみほらふ奇どもあまく出付へる中少 五言書海の
あとちにせんうに山あもれもゆーほこの細道とよあらん
とあうて覺へのよだ其傍小書付ー

ウルモ又安公せふ隣人宇津の山つきてある考下房

光行

東海道記
墨部の里邑松山あむちるう遊けを宇都の山あから山山中に
山伏先もる巧れ筆づるを山へ碧石岸下に砂を下して巖とて
翠嶺上ふ葉落く塘とぼく肱と肩ふ負面波胸ふゞくまで繋
のやれハ行肩祖れ膚うぐれゝ草衣うきぬとつども懷中乃
扇と動して微風の扶持可之斯あ森々う林波よけて藤々たる
峯波然せば貴名の誉もじ山ふ高一丈二尺うち本末ふあらん
つけらきて一方渺らぬ感望小かひよれくされ朝雲暮り
虎李將軍が柵がさも暮風谷寒一鶴鷗太尉が跡ふをひ院小
して赤羽西小かびぬみふうぐる物とてを松原植れ葉老乃
ちうるは波疲れより足ふまくほのひ若け岩も勤めで道嶮難かた
げ督うちを先に修行者一あ寄鬼床そぞりたてて又休て
立つがうはの山廻一そりてよ都もいはむれうと
行へありともだきぬるひわひざれ山河を憂ふるはうつる

時自とやいもんをすとやいもんむーと今とありて我身をとり今故
事ーともののをかひつう古今と魚ど川とのひづれ中嶽
生死涅槃猶め眺晏といひれもありれとあがれまのまか
タのとおり今日は所ともぐるゆ日づまの所ふしてヒル時
とくらん体ふこれるなりこの葉月と景より桂をかうほの皆日
今日は山房のまよりを平あれ

家集 一と勢友小りてうの山とうえにかくーく葉月の山をそ
一の庵小立入やうーかとけさんへ其菴の跡もそくゆく

知く歌詠 めぐれな在れ跡もく一夏うほう宇はの山より 兼好法印

よへ都れ峯と爰に又ーうは

古つの景れまし後ちうと今朝もたどるうの山然 光度々
ゆく圓く入りて乃ふ山や似屏風と劉禹錫ういひ青巖形とぞ
うまと江の相公せひ一眼みまぐる花の奥をまかとみえくらべ

さうりとみ往

刃さうしよ來今く花の意は晏然のうほん山と 、^{1歌}

東紀行 故殿ゆくセーはもぞーの爰れふスクふおもる宇はの山

道と僕せきよか 1夏の浦と

あくーのゆきうきの浦のゆくとまふも宇はの山道 冷泉為慰

丙辰御行 本原業おは山とく 費吟 呬遺愛 萩楓秋又春 羅山

とくゆ歌詠みて云傳なる本人のあまくちねまし俗小肉屋とも書く

山 中 園 首 費吟 呬 遺愛 萩楓秋又春 羅山

今 古 寅 名 景 境 業 平 詞 後 更 無 人 羅山

十 売 子 も 小 枝 み ぬり ぬ 秋 の 風 莲云

む さ そ そ の 菓 使 や 宇 は の 山 重 厚

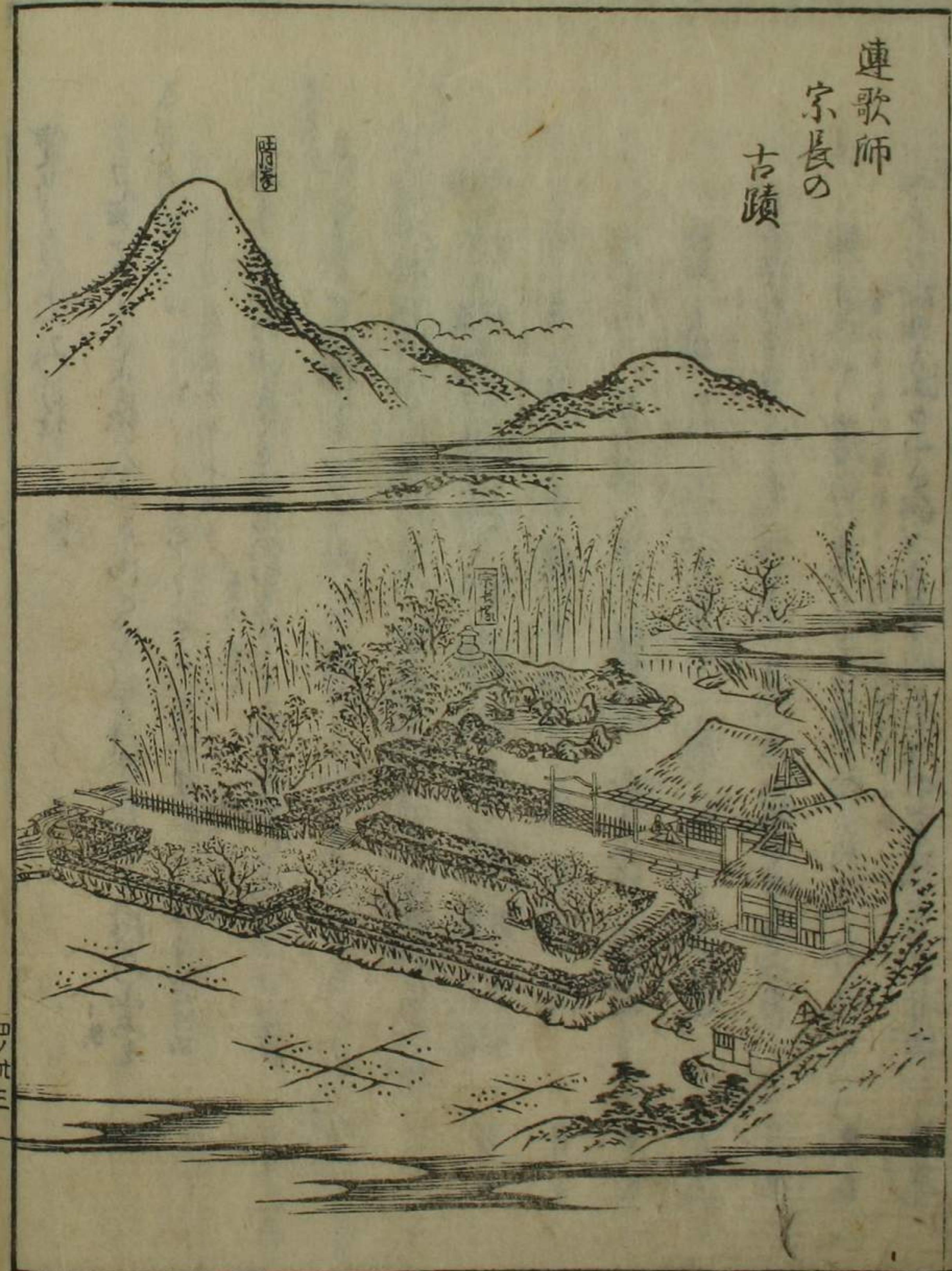
岩 鼻 や 小 妻 と 眠 は 里 猿 久 乳

先 く く 日 小 照 ら ー ク リ 梨 お と み ち 相 亂

細 き や 菓 の ま く う の ひ く こ そ う 離 亂

み ど う 和 泓 と ぶ う ふ と く 刀 と ま う 川 宇 ほ の 山 逃 ひ 走 る 云 井 湯 班 作

連歌師
宗長の
古蹟



丸子

鞍馬府すでを里半
駄鑑云文治五年十月か御平太保倉小赤て
内所と驛舍みせん半
故頗ふ頗朝々許りて散位親族小余ト
河内屋は治人をもむりて驛舍ともいは所不藝願寺と不傳刹あり

後奈良院の勅願所也

河水落りとす河はとみふすとあれ享保の海り

故殿侍下向ふもり水すてまに止宿セリ

名產盆山石

丸子の名產すく市店ふもとて沽え又暮蕷汁

梅あ菜丸子の宿れやうけ

わくは高小三あく一一小名ねたくとくけとあく

さればきくじるとくのよまとくとくかくよりく

元と後次とたて縁を絆をあくせふまくもあ我あうる

浦テ

連

歌師宗長古蹟丸子の西口六町井の方泉谷小ゆり天柱山業屋寺と

朱屋軒宗長法師ハ後花園院跡宇文安五年駄州鳴田邑少て誕ト

初一て歎智たり幽主今川上総牧義忠これと愛して左近仕

三十六葉やて上洛宗祇法師小褐して連歌を學びぬ不老も十八

葉やて蘿髪醍醐普捨院少て灌頂と遂紫燈一休和尚の禪鼎と

敲く四太本來室に陪り大德寺山門再興小力を竭し縁火暴ふく風雅小
逍遙一諸國小遊ぶ明應四年宗祇法師小勅にて新筑波集公撰ひ其
中小宗長が喰三十人勺あり永正九年今川氏親の招請よりくは泉谷小
ト居一菴が結び自柴屋軒と號し風流ともして常小一巻切紙
籲て老父娘ふ閑居幽邃小一て西の方小入柱峯聳へ東の方小叶月嶺
の活鱗鮮小一て座中に水深湛ふまれと七星沈とづふ曾て座あはれ風
通宗長の好ゆ一て座造の法衣洩も老松枝垂く風の音濃
かく永正元年正月より廬小住タハ附

山櫻ちゆの通添の事ニテ詠

宗長

終永亨祿五年壬辰三月六日八十五歳小一てより小寂に寺小墳あり近憐
は騎人懷舊け勾石原築く建ひ半多一書院小什寶あり宗長
持念れ大聖母像人磨け画於蘆屋釜一巻切き管銘残受
とよぶ連歌百韻同新式個小宗長の自第同影像を狩登秀

信の事宗祇法師の彰も毫山百劔成照れ事ぞれをあくも圓雅の
名蹟あれをあくも旅人道次枉く古跡慕ひ英風と欽一嘆息れ
やもぐくも多かり也

嘯月亭

墓品川の支流佐波川とすあり橋の西より右へ入れば小野
園堂又安部川とする故人眼下ふ

手詠古驛

真の赤い御川の西より北へ驛ふ一て東鑑平家お宿をとむる
奇遇せりか將とくつ妓もくらも歩くや

舊古

すくゑもぬもくらもあくもかくも詠が傳とある白浪

九条内侍

富士二紀行

旅人がく詠河原の内駒も足あらずそひとく朝立

堺孝法印

子秦家遺蹟か然小ありとひひ中將重衡因れし藤倉ふりなひ
かくかの長者が娘千鶴が嫁とくかの娘千鶴が嫁とくかの娘千鶴が
愛せりか將とくつ妓もくらも歩くや

平家あらかじめ中將重衡守護の武士ふ宣ひくの海も只今此女房ハ優なり
彼とくのる名とばんとくあらんと向りを猶昔久申さるべあれハ
かくかは長者が娘を乍が眉目姿心様も優ふつるをきのひてけ

二三箇年ひ佐殿の小召めぐらせりく作名とば千春よんじゅんかと申もすレタア雨
 カ一ひと夜よとよ歎あひが物寂ものしづか一いつげを折たぶら手て易琵琶琴ひびきを持もつて參さんうごろまへ中累なかるい
 角つの矢やも漸ゆき更さらく公おほれまむきにら那思なしいいまや吉妻よしつふもかう優ゆう
 多た人の有あるるよ其その事ことても今一聲せいと宣せんバシと申もすまよ
 陰かげふ高たかう遼あひ同ともド流れ云語いごふも皆是先さきの學がくれ矣よといふ白梅しらうめふ以
 詮さめ小面おもて向むけう観だんふくろくろれを三さん佐さ中なか將まさ也よ燈とう闇くらしてハ殺ころ夷ゑ氏じ
 游ゆとつふ朗らう薦あわ伏ふせくれ多た中なか累るい其後ご後ご中なか將まさ也よ波はされく軋あれ
 のひねと聞きヘ一いつ千せん九くありゆく物ものひれ種たねとく廃はいふくろん躰こて
 様さまとが濃墨のうぼく深ふか々まことに寧やすれ果たまて信濃圓いんのう岩光寺いわみつ小河おこうの澄すみ—
 後ご四よ付づ菩提ぼだいと弔たむひひく我わあられ乃の

手獄ての原はら合あつ戰たたか建武二年十二月たつぶ二年十二月たつぶ新田義貞しんでん矢別鷺坂やべつの戰たたかひむ勝かつ
 牛うの津つれ始はじく西にしの下くだり中なか押お寄よ小こ押お寄よ東ひがの海かい一いつ川かわ海かいぞれ川かわ
 菅原すがはらの勢ぜ方かた共おな小人馬ま休やす先まへに休やす軍ぐん無な火ひ放だ燒や初はじめめ日ひ暮くた隱ひれる居ゐは足利あし勢ぜ方かたから竟いよいよの射のひ放だもくろくろめめ敵の陣ぢ兵へ小こ兵へ高たかい後ご陣ぢ兵へ和わ兵へ火ひ放だ勢ぜの中なか一いつ雨あめの下くだりる草くさ中なか一いつ雨あめの下くだりる草くさ中なか一いつ雨あめの下くだりる草くさ

古枯か杜き建武二年十一月たつぶ十一月たつぶ新田義貞しんでん篠原しのはらの原はらと_{安部川あべ}上う荒料あら川かわの丘おか山さんとり
集才お林はやとまわくーの森もり
古枯か杜き安部あべ川かわの上う荒料あら川かわの丘おか山さんとり

新古今しんこきん書よ傳だんくらわくらわの秋あきは身みととれれ杜きけけ寫な

壊こわ格ご

秋あきは身みととれれ杜きけけ寫な

定家じょうけ

新古今しんこきん書よ傳だんくらわくらわの秋あきは身みととれれ杜きけけ寫な

壊こわ格ご

秋あきは身みととれれ杜きけけ寫な

定家じょうけ

新古今しんこきん書よ傳だんくらわくらわの秋あきは身みととれれ杜きけけ寫な
 舊い後ご葉は私わたくの身みととれれ杜きけけ寫な
 かじめの身みととれれ杜きけけ寫な
 かじめの身みととれれ杜きけけ寫な

後ご葉は

かじめの身みととれれ杜きけけ寫な
 かじめの身みととれれ杜きけけ寫な

定家じょうけ

新古今しんこきん書よ傳だんくらわくらわの秋あきは身みととれれ杜きけけ寫な

壊こわ格ご

秋あきは身みととれれ杜きけけ寫な

定家じょうけ

新古今しんこきん書よ傳だんくらわくらわの秋あきは身みととれれ杜きけけ寫な

壊こわ格ご

秋あきは身みととれれ杜きけけ寫な

定家じょうけ

安部川



四ノ木上八



安部

馬牛雲の
道中を

通中を

馬牛雲の
道中を

四十の
外は

四十の
外は

四十の
外は

建德

神社古桔の森のやうにあり延喜式肉今驛鳴明神と
御建德寺の鎮守となり東鑑ふとんゆ

瑞祥山建德寺菩提樹院

其一碑文天武帝白風十二年不道時法師の廟基より
瑞祥山の景勝處ふにて遠近アレと賞ば

はまきわく役行者の墓創セアシラフソヒナマニシリ中日より

密家の者移モ店々今ふつてあ

此地元來法界宮水雲心性似虛空

羅山

吟眸所不不知暮石徑霜深古寺楓

用宗古城

古枯木の山向三浦兵部向井伊賀ち築同年九月十九日松平喜久忠忠
牧野右馬允康成馳向攻克攻成せば西日本坂若山山之城を

繁山

花澤の古城花沢次堂より當日の虚空城へ行道なり

安部川

方丈より本多千み観毛ハ基の化七躰の其一軸也
水原ハ甲斐ノ白根と上河ニ流る丸子の方を藁科川と

安部

安部川とより源流より盆山石生る駿府の町也貢ふに上

萬葉佐可故要氏阿陪乃田能毛尔爲流多豆乃

原順

等毛思吉伎美波安須左倍母我毛

拾玉

万葉佐可故要氏阿陪乃田能毛尔爲流多豆乃

清原文輔

舊古今

佐可故要氏阿陪乃田能毛尔爲流多豆乃

中勢ノ親王

寶物百首

山崩ふきり矣も坂より下の田面小降りて之

徳三位賴氏

河内市

河内府中街の名物の董細工葉細工紙合羽

其外

藍綾細工、懷中、茶芝川海苔、盆山石、鉢植樹本蘭

新舊古

山崩ふきり矣も坂より下の田面小降りて之

後賴朝氏

縣櫻山

府中縣向社の神山也風土記云青葉岡と号ひ申む

五百番

貨古

後法華入道
大藏院

風雅

氣うなぞたれとされまじ日ふきけのやうに山のうぶひを

新拾葉

正三位知承
正三位成國

のうる小川を山せ初へられ瀧てみぢれ錦とるもん

拾玉

右備足慈惠

薺川百首

紅葉ちる猿を山のさとしの物とみてやはま波をくん

右備足慈惠

猿間社

例祭 四月初申日十一月同日

家集

正三位知承

散

一々ると河擣山をみぢ葉孤あけ泥ふとし殊とをみ

源氏真

祭神

本花開耶姫命 左瓊杵尊(社内小御子)

右萬櫻姬食惣社 余神大已貴令

奈吉屋祠

本社の例あり

奈

神大山祇令

賤

櫻井山もうふかねゑが代ふかびく幸まやめりれ松風

後水尾院

見原益軒吾端路起云あ社の富士猿間の新宮也延喜年中富士の本宮
はうふ勸修も本社ニ而して外ふ向ふ極社もふとく己ふ向ふ
山の宮の壇百四級あり同所あは山ふ穴ありそことくばとつ
而社の宮はうふ勸修也大社あり日本ゆく神社比歴屢々年
日光城等一と猿間社次二とてといふ社官ハ新宮左を熱社
宮内とくお人のりと書き

圓山

猿間山の巖小あり福田寺とよ駿河祀云慶長立年の

四ノ三十八

流之井

佳泉也

別雷社

府中西の坊小社也一說云延喜式内大歲御祖神社是ことを

墓集

別雷社

府中西の坊小社也一說云延喜式内大歲御祖神社是ことを

清水

府中安東村有慶長の中京師駿水寺欲ふ移モ本宮

別雷社

府中西の坊小社也一說云延喜式内大歲御祖神社是ことを

名産阿陪榮

上の方宇治信樂山也

駿河

駿河流や花櫻も榮の匂ひ

足久保親音

足久保村法明寺小うち曹洞の禅刹也本モ祀堂也

足久保

足久保村法明寺小うち曹洞の禅刹也本モ祀堂也

燒津神社

府中の南三里海濱燒津村也土神とて延喜式内に
有名妙の益頭郡燒津は日を以て燒ばハ日

年紀万葉集等ふアノトメ

古事記日本紀相模國トメ

景行天皇四十年冬十月日本武尊初至駿河其處

賊陽從之欺曰是野也麋鹿甚多氣如朝霧足如茂

林臨而應狩日本武尊信其言入野中而覓獸賊有

殺王之情王謂日本放火燒其野王知被欺則以燧

出火之向燒而得免

云王所佩劍裏雲自抽之

劍日草薙也聚雲王曰殆被欺則悉焚其賊衆而滅

此云茂羅玖毛

之故号其處曰燒津

古事記日本紀日入坐其野余其國造火着其野故知見欺而解開其

姨婆比賣命之所給囊口而見者火打有其裏於是

先以其御刀莉撥草以其火打而打出火着向火而燒

日本紀抄鈔云日本武道征之時道在伊勢太神官參禮一
腰令ちう授らう御劍の囊けいが解く而火とち出る姫戻を
滅し退きゆふ囊の事旧本襄裏書兼文云

万葉やいづれ感あく私もる（と云
焼津邊吾去鹿齒駿河奈流阿陪乃市道尔

春日歲首老

神皇正統紀日

景行天皇四十年夏東夷叛^{そぞき}境^と不^{そぞ}還^{まど}又日本為

皇子伏遣^{すくは}士吉備守^{さき}大伴武日^{むひ}と左右將軍^{さく}と相副^{あわせ}し阿倍^{あべ}

十月小莊通^{こよなう}伊勢大神宮^{おほ}伊勢太神宮^{おほ}守^め大伴^{たん}命^めに^み申^{よみ}御^ご金^{かね}神^{みわ}劍^{けん}授^あて

謹^{こととひ}ね^くよ^く是^ぞ名^な改^か姓^{きよ}雜^{まつ}姓^なと^て云^ふ又^{また}火^ひと^て化^なび^くを

つけ^こ夷^ゐ凌^{りよう}火^ひ燒^やニ^ふ落^さス^るみ^る佩^{うな}聚^{うの}劍^{けん}み^るて^て側^{わき}の^を火^ひ

を^む生^む是^ぞ名^な改^か姓^{きよ}雜^{まつ}姓^なと^て云^ふ又^{また}火^ひと^て化^なび^くを

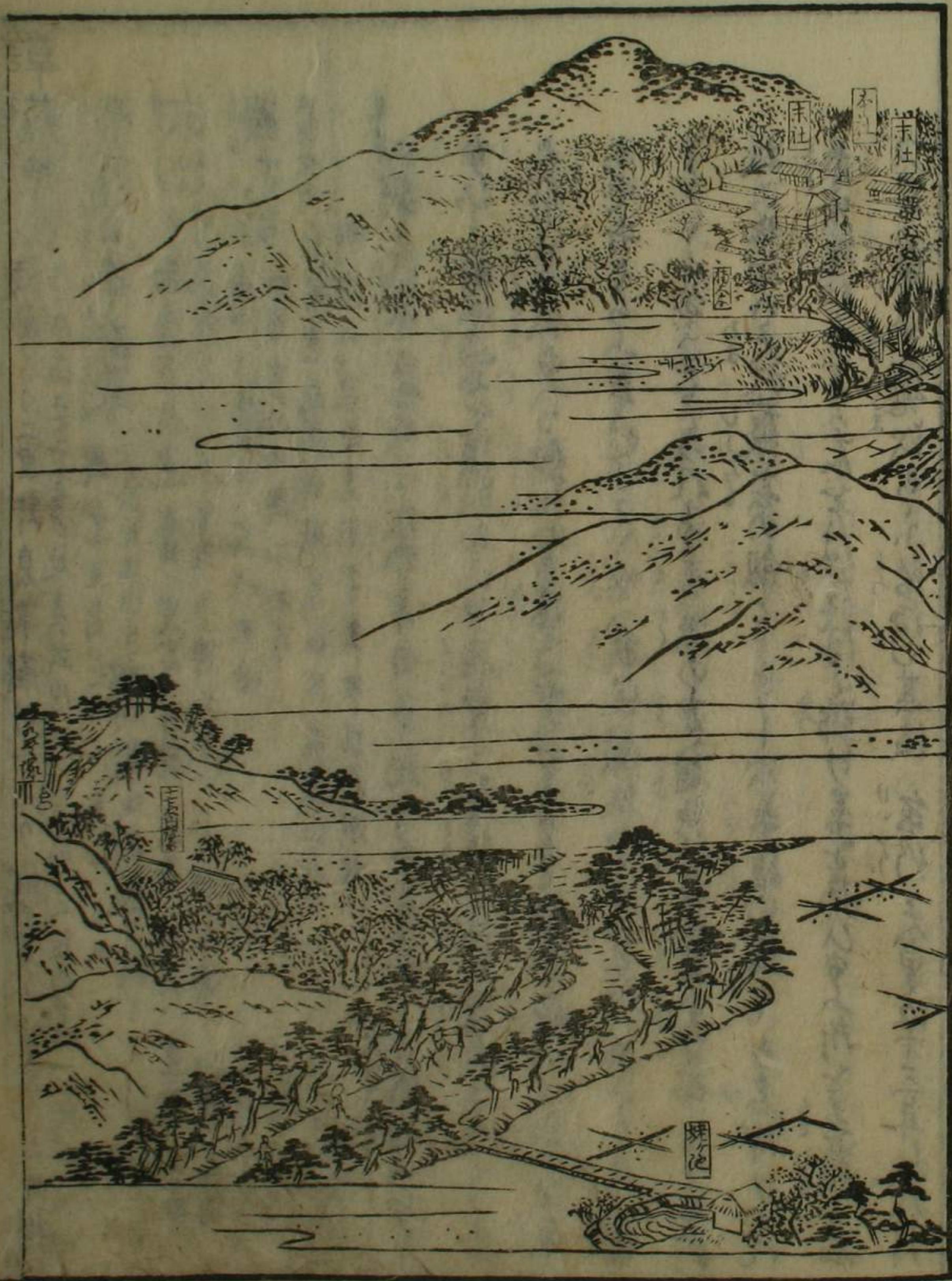
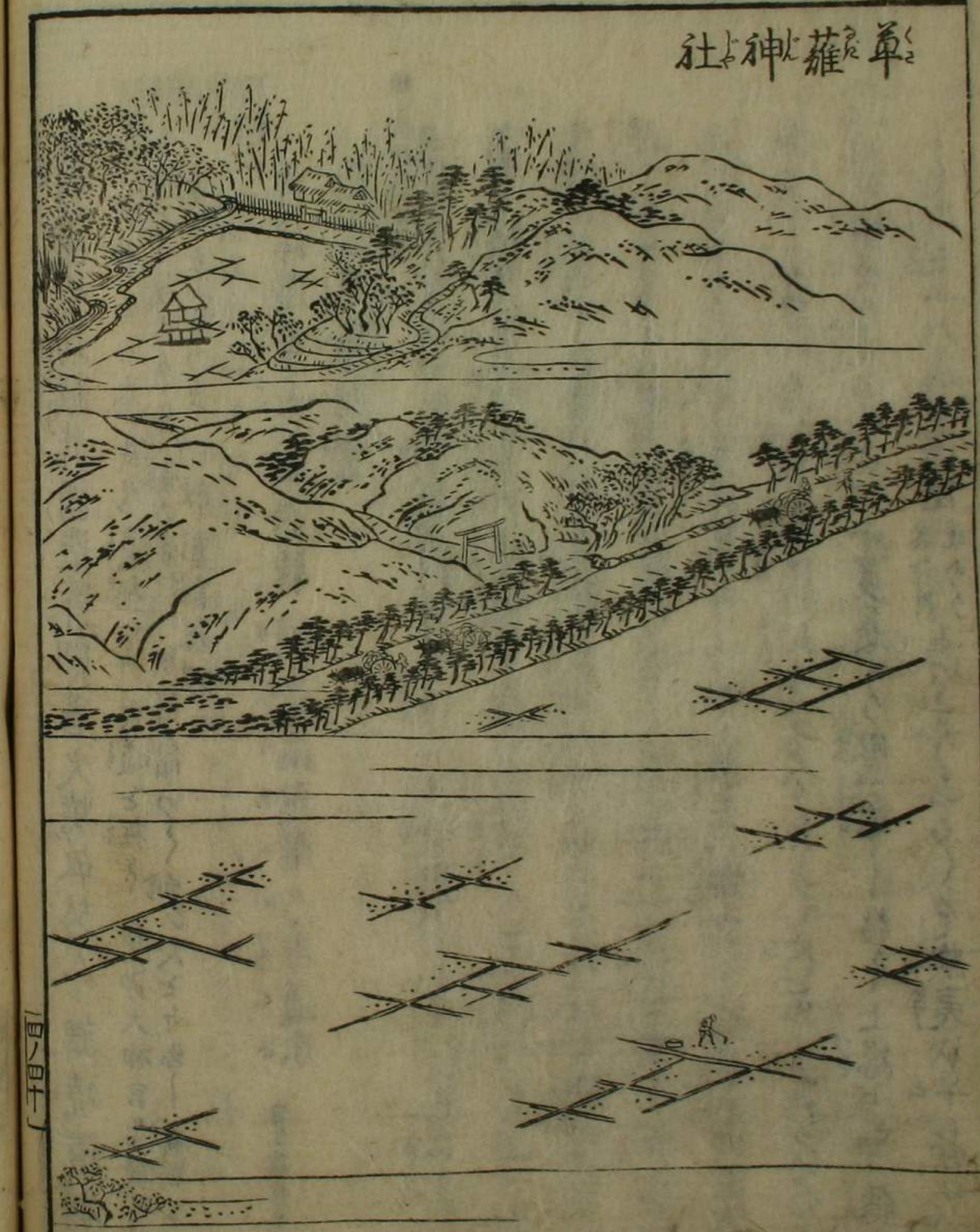
つけ^こ夷^ゐ凌^{りよう}火^ひ燒^やニ^ふ落^さス^るみ^る佩^{うな}聚^{うの}劍^{けん}み^るて^て側^{わき}の^を火^ひ

じて陸^は國^く不^{そぞ}入^る高^{たか}原^{はら}の^を圍^い脱^{だつ}り^く火^ひと^て化^なび^くを^む

其^{その}所^所異^い

あひ^くひ^くと^て火^ひと^て化^なび^くを^む難夷^{なんゐ}火^ひと^て化^なび^くを^む

草薙社



草薙

草薙神社
驛舎より二里許東草薙村小あり海を入る平五町

祭神日本武尊
例祭正月七日六月十五日

末社本社の左の方住吉春日愛宕白鬪巖鳶稻荷荒神天神

補大樹高サ一丈八尺周八丈余

内辰紀行欲爲黎民解倒懸東征到處幾山川

腰間一卷自蛇龍動雲氣吹消蔓草烟

羅山

社傳云日本武尊東夷征伐の半日本起小弓の弓と吉媛國ふり
久の時也て逆賊ちよし原聖火を放て尊燒殺さんと
名を尊佩ゆる劍ぬき遠づきげさがりと伏在い藤のと藤をも
ちておをうそ牛けてく唱拔ひ劍ぬきタノリアリ乃弟
のくくかゝむられあ夷賊の方ノ烟をびき藤を恙もあらずされ
叔正兵初ヘ未だ藤云の劍とよせ一公至難の劍とも名はれ
尊は燒ひところふとは焼木と躰け事と拂ひゆの所と難難と名
づきて尊は荒魂歟と小笠翁も其後筆行天皇五十三年秋八月

冬皇群鄉小詔にて曰異の日本武尊の征サ國郡巡視せんとく
直小車駕歟裏みよし御すまび伊勢いせから奉まつさ東あがまノ入いりく九月廿日又に鑾轡らんぢや
停先しめされ尊は神亞じんあ鎮ぢんゆゑ其そ所とえ夏原なつはらとつへ初はじより西小神社にしこじんしゃあり
レひ天正十八年官家くわんかに令こめめと而ひよよふ移うつ再興さいこう而ひゆゆ河川かわを右ゆれ東
小わわく毎年九月廿日ハ杏形祭とうがたまつりと銘めいぶ香の形かたちて神祭かみまつりト社家そしゃより
產子うぶ家いえ尔配まるあれハ天皇あめのう神かみ御ご遣し一いつの遺風ゆふう都つゝト社頭しゃとう及び村
中なかれ土地ぢちみる惡急あくつきの土つちとて灰ほの心こころ一いつ櫻さくらふ逆さか征せい伐ばの時とき業わざと難
拂はひ向むか火ひ劍けんのの戮ご一いつの兆あざめんと立たれれる

梶原景時墳
其の其一碑ひ又嶮路さざわら十七八町生なれを景時自殺場じさいじやうとく加輪かわの石塔せきとう
あり又名馬ま井里せい馳かけりて其時馬まの登のぼり下おりて走はる所ところとて吉田よしだ町まちのあいよ
今小釜こしふ半食はんじき生なく生なじげに巖いわ山下さんげ小龍泉こりゅうせん山中さんちゆう風景ふうけいの如ごと此こ
又山中さんちゆう小括星馬こくぼくせい蹄は石いし蟹かに水石すいせきあり山下さんげ小龍泉こりゅうせん此こに對たい
船門ふねのま走はるる小梶原こじわら像ぞう七しち人の牌ひあり其外そと頼朝らいすず之の室政しつまさ子この
持念じねん併ならのゆ意い輪わ規吉くわきちか手て本もと也よ

正治二年正月梶原平二景時馬園一宮ひや御ご縁えんとゆゆレれ將軍じょうぐん頼家らいか
東鑑とうかん大意だいぎ

今不憎まし奉りて子息家は子孫相承一上洛に驥馬の清見聞を其迫
所れ甲乙人目的と射りて集りしき途中そりあひ越代もく騎手一ヶ
ぞ人々怪ニ箭矢射多ふ梶原は孤崎モツ一合せそ遂小軍に成ふる芦
原小次郎飯田五郎吉香小次郎年少の所れ武士先ふ進て戦ひるやうふ
梶原京辰ホミヌ射れぬ是より圓中れ無ども大勢あまきて責められ京
國景宗ニ京則京連も射死しき景附京季京高叶ハドともハ後の
山駆入く復十文字に搔切てさびかうり傾て其首とみて大路小路
つ後少馬蹄小きて桑村お朽果ト梶原ハ相山サヘ一本の中から
意庵佐敵伏助けなう一陰極やうりて頼朝ハ天子下伏さうめひ
かば京時昂附と傳て威を海内小讐せり殊文安舌才皆わん人言ふやうに
侍大將とかく平家追討れふ西海小郡ニ源延尉と逆讐れ争論小面目
と失ひ義経伏作一タリ其酬てくく申らへり其役延尉ありしや
範頼源家傍代の臣属多く滅亡しきみる小糸時政子貞義時

ゲ姫計小よみと我あら候る
者うちある宿ふわる本陰ふ石は高く候上く目がた川を隔て候
人ふるれを梶原が墓と呼ん道のひうれ土を盛ふるゝと刀を
みし於基中納言河口をもとて久く年く小春の系れあひすと
荷そひゆく是又古き塚と名づば名也と云ふ城也と云ふ草木傳
がらとふへらねども心あり人ひきふと洞をもあもんの梶原と
將軍一代の國ふをうござ勇ニ零れ名代傳う側ふ人多くぞくらう
き半うあうんがこのひだをもてゆして勿ち不身死因へがそゞか死ふる
れびひと誰とも延んとあひく都の方馳せうるほどぶ駿の國吉川と
云所をも村れ小たりとぞ一ヶにはあうて有うと衣裳ひ合ふる
瀬岐行法皇廢帝郊ノ勢をひて白峯と云ふ山をもあむの西の所と
すもひらんのうちふれせんとあうてうるほど乗らふまいてひの風のもの

九年六月に及りども二月とてアをはなとひれふ覺ゆ

あれも度ふうれ
西行れたるをさみるなり
えり

姥ケ池 海を平川地村田畠の中あり。傍原と方三間許
姥ケ原と方三間許
姥氏の妻姫始くい池へ身と被て室一くる其怨霊は化小
血乃水脉ひ池小淀に繋りて溢流するそと多く早天も涸せりん
坂田園地相らん庭中の泉水今どくあり。又鐵
州有馬車をぬ湯とぬあり。又鐵温泉にて懲佛する半
姥ケ湖の水一羅山先生の銘あり

撮州名底圖會小出セリ

神無服

有度院 神社の前小至りキテ。故有度院といふ

相模

新勅撰 うと深け字をみやせとはるはるあく意之づる

僕令

有度院はうをひ田子方浦の聲りを喜んで

平若盛

龍興記

あみたの山之月と旅かしわふると月のちあらむ

西行法師

山家

内辰紀行寂

然長隠久能宮明徳惟馨神國風

羅山

南應海道記

億兆大臣望不及帝鄉路遠白雲中

宇度院とされば浪の春風の夢跡小はれすむ所で

源左大臣

地の山寺あり四方たゞれゆ四明天台乃寺も堂密繁昌

西行法師

本山中堂の儀式より一乘讀誦の聲も十二廻中に響ひ

實現れれば詔音と浦陀洛山の聲容出現の月あつて

大法興隆めぞり教百箇葉れ星漢彌うそて僧俗止住せみ

も云能宇は棹舟處をとるて表の石神山腰小渡て惡障がふ
せきと形の本容の寺内小納めて岩業と云ふ千手観音の山

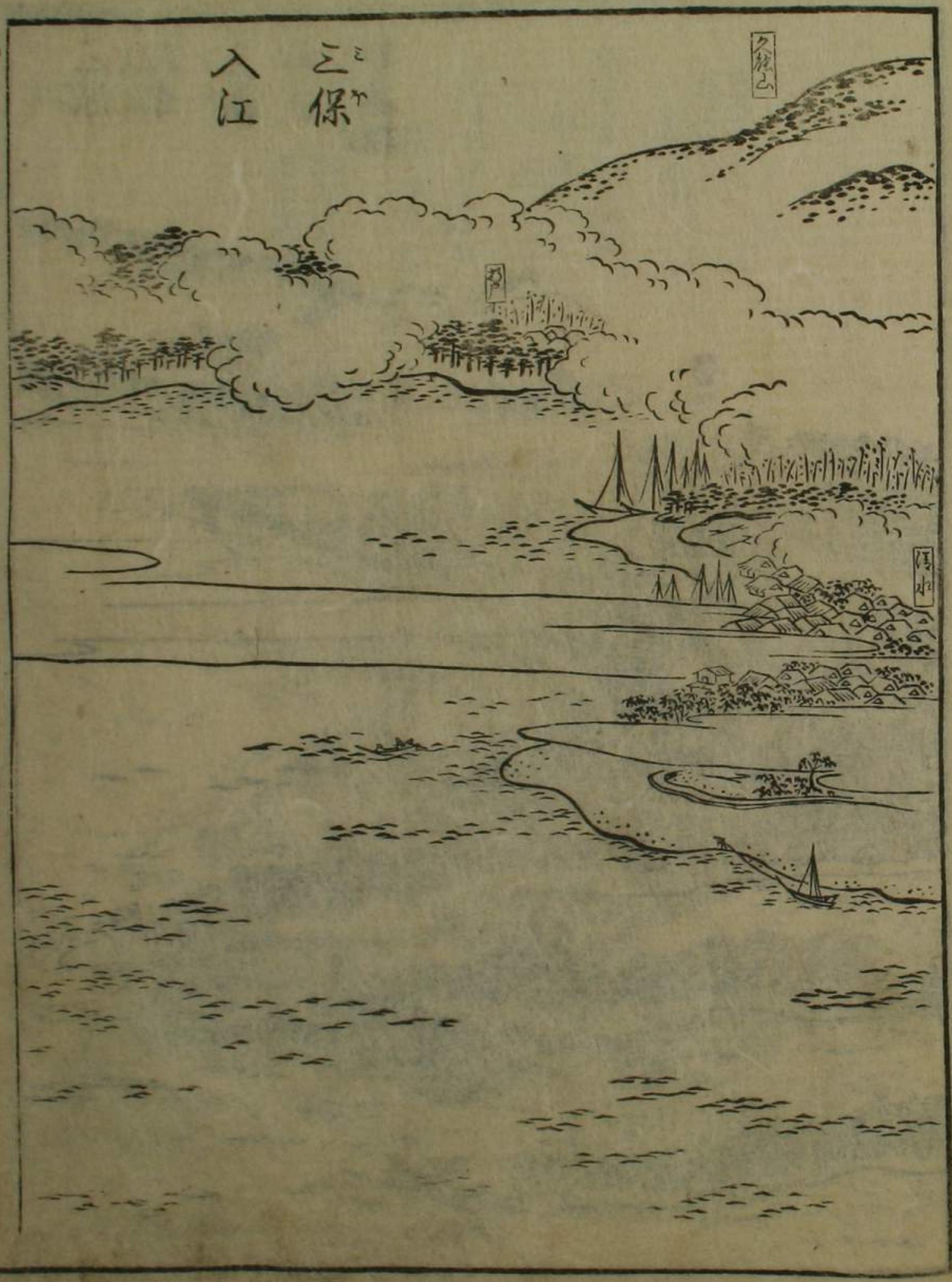
山中堂の儀式より一乘讀誦の聲も十二廻中に響ひ

石船小舟くい地ふぐらうあひうち其舟若神と成く山路の坂ふ石船
護法と号す彼海峯山れ衣服を一方より少へ應て有縁船は山小道
宇度院れ品天面伏地小湯と舞乐ばば院ふ酒をりむし猶河
たまといへ人々の渙会せ下に樂がちて舞るはそえするびじ舞
タス人の見ゆがえそものとくふゑで云ふ隱ふタクモ体はこれを
一面形と覺せりとまふれかとうて寺は寶ねとくよにて其寺小舞樂
がちて法會が終りもとをまづ子孫舞人氏と二月十二日常樂
會とくち中れたまご其後又人極り廻雪舞の花がまふざき
曲風の暮月の舞と安ゆよ河へは院伏られ松ふ雅琴うゑく波ふ川
づくわりえ人の樂は今すふやう

徳ありしてはととみをま爲もめびがたのあとのちを
ふどくちんくのうト有度郡村松村ふあく江尾駅より古町
補陀洛山久能寺新義真言宗來近院と号く坊舍十室
本尊千手観音御中ふ藏む

鹿内小茶師堂獻魔堂鎮守ハ十二所樹碑多其外桶三何洞
荒神祠鐘樓ニ玉門塔藏堂等あり
寺起云
持れ當山や推古天皇御宇久能忠仁卿駿河の園宇小任ト高圓小
下やの麻田猶一タヒ深山小入所ふ老杉け株うち金岳の先あり殆ど
のやしこあれと櫛々々カシ木閣檜檼金長立す群のかひ規定乎得の金持
のをひ膽小名ト寺佛院と管て安立一ちり百町の田園欣喜捨して寺産
とひある夜八旬の老僧香深の袈裟ハ拂く久能つれ松木立く我ハ補陀
洛山の淨土ちり度花生のあふや小承く新現モトハ經て差覺し故ふ山
號伏補陀洛山といひ本願の名从うて久能寺と號く厥后百四十朱政
書是七年丈僧正行基菩薩海肉巡國の勑まく小立募金像と胸中に
藏てみづくかよ大悲れ像と彌赤して安久の本尊是はあ寺ハ夙京
の坂小一ト土峯ハ鮮やて愛鷹翁根ニ子山近くハ薩埵の行田す唐
崎電車見聞溝水れ溪入江と走る真帆行帆渕の舟所くからさく
三種の松原直妙ふ一ト出修とハツ頭といふあれう眺金の坂一





人能寺什物
 二福八體弘法寺所載也。龍王面天生釋迦の像
 相御景弘法大師也。
 法華經廿八品考羽院待賢門院也。其外高合書
 爰の面弘法大師也。
 十五條袈裟聖一圓師入唐の後高山小劫む
 其外弘法大師等恵心僧都等廉金啓書記等吉舟画ちあり
 丙辰紀所久能山の状と見る。海峯孤絶の所光觀者老人堅坐の跡えり。補陀
 洛山も申へ三里船り東小ちあくノ人能寺と云く聖一圓師藁科乃
 産あくニ寺の堯安法師と師子ト台教を薦めび一ヶ入宋れ後達摩宗
 弟傳へ。東福寺はす。恐くより。その人あるも久能の尔長老と称ぐる
 宋より渡へ。タル瑪瑙の羯鼓とい寺へ送られる。又源豫州も薄墨と
 云ふ様笛と寄進せられ。テ。唐も北奥の狹山からくる。しかん
 寺僧の書とるや。初進帳はあり。久能寺と云ふ。然く
 えあり。其外。推古天皇が附時奉創せ。をどあれと大原
 疑。久能寺と云ふと云ふべ忘れゆき也。
 遠尋幽寺到斜陽過客居僧談兩忘
 身是此山清淨色何求無希在南方
 羅山

二保の
松原
二徳
神社
羽衣松



二徳
神社

清涼殿
春盤所
毛紙散小
をもかた二保の
沖はれ
羽衣松や
浦の松原

典仁觀王



二保松原

駿府より武里東、追々村入り入ては木の邊にて八町あり、
折角村と屬く之保へ到る行經を里半筋三箇より多くあり、
折角より三保の郷崎といふ字で四十二町九十四間南北幅十九町四十間三保
村より修造中を廿四町四十二間、小字多々、奥所御衣瀬郷八頭
渡瀬、修造中等々、宇田久呂等々、万五丈、風早之三保浦の一名。

風早之三保浦廻平橋舟之船人動浪立良下

廣古

忌れ玉よ鷹乃國の波まくりあて見へ一ノ口乃浦松 王葉
王葉 王葉
風雅 風雅
新宿 王葉
亀峯と百首 風雅

御穗神社

御穗神社 岐櫻松原の中よりあり延喜式内廬原郡三座の其一
祭神 二保村生土神 例祭十一月中申日
御穗神 風土龍云御穗律年余 御穗は媛命之祖也
相生松 年社より寺西、古楠

羽衣

羽衣松 深とひふ古松を樹あり、いはゆる御衣松と云ふ
相生松 坪原の中より、牛頭天王祠 子安神 白幡祠有
羽衣 妖魔、牛頭天王祠と名づけ、古楠

御羽車

御羽車正あり、御捨送 武部主拂、賈業伊豫ちふ侍たり時彼園の
三傳明神、あつまらむと傳ふ

有度淡不あめ羽衣むくみすあらん神やのをあふ
はるかに御屋の三傳明神をもとし、うきは淡の羽衣妻をみて今もあれ神やあらん

保佐泰隆

寛政丙辰秋八月在
久能山上望三保嶺

平安原在正寫點

伊豆大山

沼津

三保松原

易集

天井石

さくでさん

あしら

あせ

ね

系誠雜經

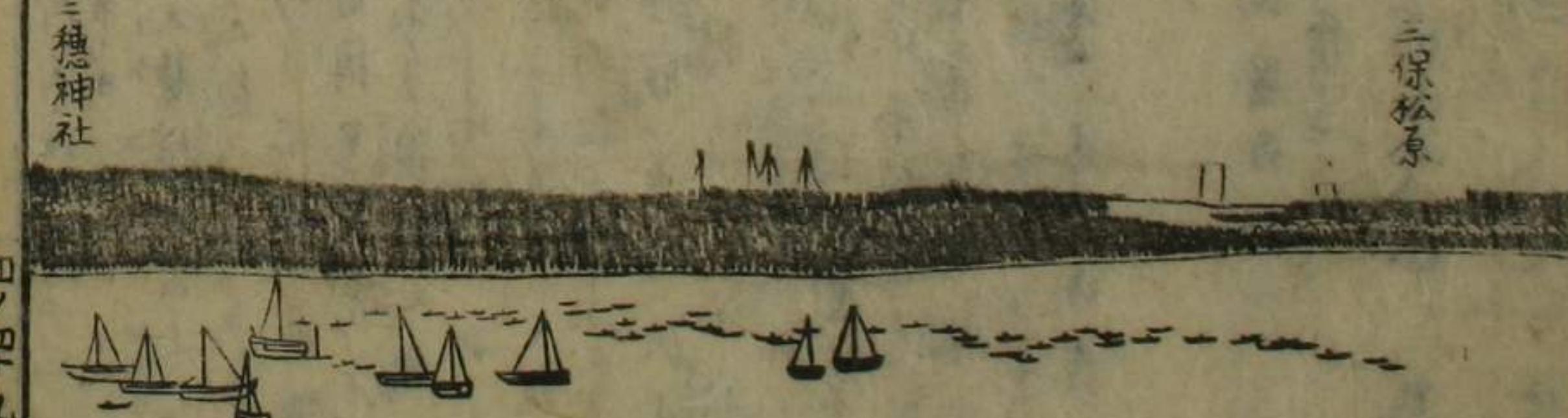
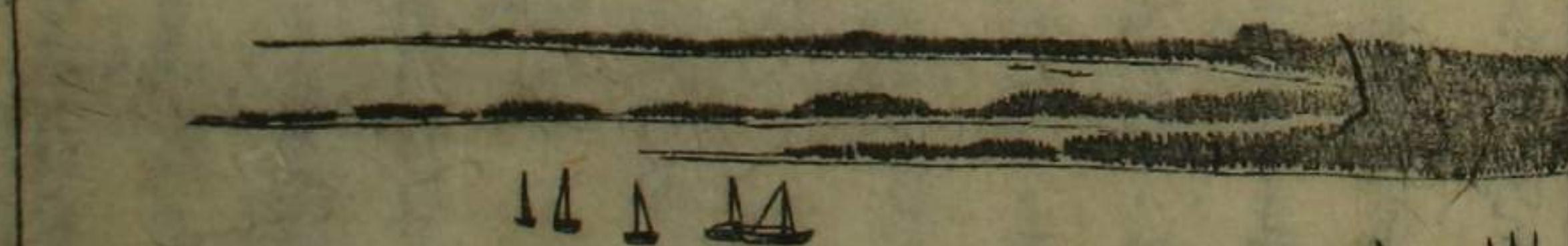
三穗神社

四ノ四九

嵯戸風煙渺浦
松仙氣玄羽衣
何處覓帆影挂
雲端

平安畠橘洲圖題

愛文雁鳥山



むしとえとくし女れとすてげね原に羽衣公志^トと渙まのむろひ傳する
半の川のふきやらんと人のゑと一つかの被固法師^ト有度^ト渙まの羽衣

まうまよとよわるこれかづてニ保^トハ駆^トは圓^ト度^ト郡アマツシマ小あれをめり

東行紀錄日 草約水肌神女容聞名自古問遺蹟
尾州亞相義直卿ニ保^ト奈^ト神^ト半羽向^トニ保^ト奈^ト神^トハ
仲哀天皇^トトヤハ神書^ト考^トニ總津姬^トト^ト高產亞

子^ト御^ト女^ト大己^ト子^ト小媛^トゆらんとてえよすう下しゆ^ト名^ト姫^トお

のあひて羽衣^トけやひ女れえぼう^トたる物語是^トあうと神主^トや
せば何とはちうにづが又入宮^ト神主^トり侍^トる縁起一卷 仲哀天皇

多^トよ^トつてありいとをぬけ國^ト日本武尊^トと祀^トモヤ所^ト多^ト連^ト
其^ト拂^トふ要^ト天下治^トなま^ト皇^トアリ^ト祀^トリ^ト國^ト縁^トも育^トべ^トキ^ト云

まほ二被^ト松原ハ吉婦^ト跡^トかのく名^トく勝^ト地^ト小^トて古人の秀^ト麗^トキ^ト

久能宇度^ト渙^ト東^ト連^ト出^ト嶋^ト其間^ト重^ト船^ト下^トて洲^ト渙^ト也^トあり
短^トき^トあ^ト廣^トき^トあ^ト狹^トき^トあ^ト中^トや波^ト百^トみ^トれ^トの繩^ト小^ト枝^ト葉^ト沙^ト風^ト
小^ト吹^トく^トそ^トられ高^トき^トあ^ト低^トき^トあ^ト直^トき^トあ^ト曲^トれ^トう^トを^ト舞^ト逸^ト窈^ト
窕^トう^トて^トふ^トれ^ト矣^ト人^ト紅^ト粉^トと^ト粧^ト一^ト度^ト小^ト笑^トう^トめ^ト一^ト顛^ト小^ト東^ト小^トれ^ト方^ト
見^ト度^トせ^ト名^トあ^ト富^ト士^トの高^ト根^ト愛^ト鷹^ト翠^ト巒^トあ^トゆ^ト傳^トケ原^ト吉^ト原^ト蒲^ト
原^トれ^ト驛^ト薩^ト壠^ト山^ト興^ト津^ト川^トれ^ト流^トれ^ト清^ト見^ト罔^ト清^ト見^ト寺^トの^ト達^ト聲^ト悠^ト揚^ト
月^ト小^ト清^ト水^トれ^ト漆^ト瓶^ト一^トく^ト入^ト船^トう^ト出^ト船^トあ^ト漁^ト舟^トの^ト梢^トと^ト走^トゆ^ト疑^ト
乗^トる^ト妻^トの^ト置^ト南^ト々^ト滄^ト海^ト洋^ト一^トて^ト大^ト鵬^ト二^ト千^ト里^トの^ト羽^トを^ト仰^トい^ト身^ト
荒^ト儀^ト浪^ト小^ト走^ト深^ト川^トワ^トの^ト鮑^トも^ト海^ト士^ト潮^トも^ト僕^ト女^トみ^トみ^トと^ト業^トく^ト
化^トの^トを^トぬ^トぐ^トの^ト御^トう^トわ^トれ^トあ^トぶ^トる^トか^ト御^ト渙^トれ^ト中^ト小^ト家^トの^ト波^ト
渙^ト小^ト頭^トれ^ト洲^ト寄^ト成^ト尾^ト宇^ト津^ト久^ト見^ト船^トキ^ト呼^トふ^トも^ト中^ト央^ト小^ト三^ト總^ト神^ト社^ト立^ト
空^ト社^ト頭^トハ^ト神^トさ^ト鳥^ト篭^トの^ト落^ト羅^ト山^ト子^トれ^ト書^トれ^トと^トも^ト羽^ト衣^トの^ト渙^ト小^ト羽^ト衣^ト

れね様田祠よりひとわ園を海辺の神社の什寶小天羽衣と羅絹衣
綿會あらう天人より作り一と少漁夫う天人小羽衣公灰（シロヘ）ノラフモ観
裳羽衣の曲と舞り七寶充滿の寶物摩利（マリ）トと廻（アキラハ）モアモ
アモニ懸（スル）テ此ね原（ハ）廣く龍々（スル）テ紀の岩代の結び松不倒（ミカクニ）枝（ハ）縦
て結び松も多（カ）テの野（ハ）新願（スル）モアモア（スル）モアモア（スル）モア
松葉（アラシ）多く又肉達（スル）モアモアモアモアモアモアモアモアモアモ
ムレ五九月廿日（ハ）近郷（ハ）馬公多（カ）神（ア）小繫（スル）モアモア（スル）モア
む（スル）風流（スル）名（スル）而（ハ）之（スル）士（ツ）路（スル）圖（ハ）其例（スル）遺（ル）
メノ然（ハ）れを二園（ハ）名山（ハ）小相對（スル）の名勝（スル）ノ

江尾
駿河

の谷
山

河（ハ）梅雪（モウセイ）も（スル）小龜（スル）甲（スル）荒（ハ）後城（モウシタガ）廢（ゼリ）

ムリ（スル）五九月廿日（ハ）江尾（ハ）駿河（ハ）馬公（ハ）神（ア）小繫（スル）モアモア（スル）モア

四ノ五十一

富士見

富士見（ハ）モアモア（スル）川（ハ）傍邊（ハ）まる日（ハ）高（ハ）立（スル）オハリ（スル）とゆく

吟泉宿村

清見（スル）モア（スル）ある（スル）渡れ河（スル）モア（スル）モア（スル）て（スル）富士の根（スル）

岩築（スル）山（スル）モア（スル）

三保（スル）が（スル）傍（スル）れ（スル）水（スル）モア（スル）れ（スル）林（スル）モア（スル）れ（スル）

庵（スル）名（スル）川（スル）川（スル）下（スル）（スル）（スル）（スル）（スル）（スル）（スル）（スル）（スル）

せ（スル）川（スル）や（スル）早（スル）頃（スル）と（スル）（スル）（スル）（スル）（スル）（スル）（スル）（スル）

新（スル）宿（スル）清見（スル）深（スル）閑（スル）外（スル）いは（スル）のね（スル）浦（スル）魚（スル）て（スル）

ま（スル）本（スル）ワ（スル）も（スル）か（スル）極（スル）む（スル）ふ（スル）店（スル）水（スル）少（スル）小（スル）舟（スル）

新（スル）宿（スル）清見（スル）深（スル）閑（スル）外（スル）いは（スル）のね（スル）浦（スル）魚（スル）て（スル）

廬寄（スル）新（スル）千載（スル）猶（スル）猶（スル）猶（スル）猶（スル）猶（スル）

新（スル）宿（スル）清見（スル）深（スル）閑（スル）外（スル）いは（スル）のね（スル）浦（スル）魚（スル）て（スル）

原俊翁

ま木 猛勝のこゑに浪の支をり翁み川へ風ふ夢さうく

藤原定氏

現存六帖 風吹とまことに波あはれ猛勝はるみの浪へ舟もかづりだ

前人題言

角田川 景民^{トシミン}薩摩^{サツマ}博山合戦の時^{ハシマヒ}川邊小旗^{コヘイ}とお立^{タチ}し うきうちべくとぞ

保養物語の角田川^{ハシマヒ}の氏藏下^{シヤウ}船の場^{ヨコ}とほすく又大かずも角田川

あり大和名所圖今ふるくとも澄月お挂^{オハガ}ゆ紀伊^{シイ}よりあれへ大お

紀伊の國課^{カントク}あれを

井蛙抄 謂れらきりべ

都をさくもあれや唐傷は角田川奈も名よせらうひ

走家

支木 店原やそこからあれ猛施たびくんれとおどる浦の水

源家長

家集 さみこ川の風立ちて海も萬葉を吹作つて

源氏真

清見園 村老云園の古跡^{ハシマヒ}今の清見^{シタマ}の門^{モリ}とぞ八雲^{ハシマヒ}御抄^{モリ}や駿河の

羽見花 海を富士の樹^{トキ}と書く

千載 清見が^{ハシマヒ}園ふしまにて舟を嵐のさくふ本葉をうなぎ

原氏真

續古今 忘れ^{ハシマヒ}ま清見が園^{ハシマヒ}波^{ハシマヒ}より處^{ハシマヒ}すとぞ^{ハシマヒ}三保乃浦松

中勢^{ハシマヒ}義王

新後撰 清見^{ハシマヒ}云^{ハシマヒ}はまぬ浦風^{ハシマヒ}小月^{ハシマヒ}をやとん波^{ハシマヒ}の園^{ハシマヒ}守

法橋^{ハシマヒ}賢^{ハシマヒ}季

新後撰 閑^{ハシマヒ}の戸^{ハシマヒ}まこと明^{ハシマヒ}あして清見^{ハシマヒ}海^{ハシマヒ}をとうの^{ハシマヒ}とよ千^{ハシマヒ}ちば

今上御製

日 さよみ^{ハシマヒ}こそ碌^{ハシマヒ}ひづひひり苦^{ハシマヒ}かと園^{ハシマヒ}ふまくいぬるの^{ハシマヒ}前中納^{ハシマヒ}有房

僧正行意

風雅 駒^{ハシマヒ}立ちて^{ハシマヒ}走^{ハシマヒ}る身^{ハシマヒ}をもあ^{ハシマヒ}をせん^{ハシマヒ}よみ深^{ハシマヒ}ちかく花^{ハシマヒ}波^{ハシマヒ}の園^{ハシマヒ}守

法橋^{ハシマヒ}頑^{ハシマヒ}智

續千載 さくらの名^{ハシマヒ}とはそぞ先^{ハシマヒ}て清見^{ハシマヒ}が^{ハシマヒ}とく月^{ハシマヒ}ふ園^{ハシマヒ}ちやる紀

中臣祐道

續後拾 キハあをねむをもあら川^{ハシマヒ}よみ^{ハシマヒ}ふもぐる園^{ハシマヒ}ゆゑん

法橋^{ハシマヒ}頭明

千葉首^{ハシマヒ}わ^{ハシマヒ}ねりと波^{ハシマヒ}ゆうさ^{ハシマヒ}清見^{ハシマヒ}と園^{ハシマヒ}ふれまよとぞ^{ハシマヒ}徒^{ハシマヒ}三位保季

法橋^{ハシマヒ}頭明

草庵 清見^{ハシマヒ}深^{ハシマヒ}闇^{ハシマヒ}あえも^{ハシマヒ}旅^{ハシマヒ}人の^{ハシマヒ}よみ^{ハシマヒ}ふえ^{ハシマヒ}あらひも^{ハシマヒ}とぞ^{ハシマヒ}保^{ハシマヒ}の松^{ハシマヒ}不^{ハシマヒ}毛奈信

田口益人

淨見^{ハシマヒ}川^{ハシマヒ}う。よ。

支木 清見^{ハシマヒ}川^{ハシマヒ}うみとふを用^{ハシマヒ}そせられてあくふ瀬^{ハシマヒ}の入海

衣笠内斎

清見^{ハシマヒ}浦^{ハシマヒ}今^{ハシマヒ}の店^{ハシマヒ}村^{ハシマヒ}とぞ^{ハシマヒ}多^{ハシマヒ}は所^{ハシマヒ}名代^{ハシマヒ}の膏^{ハシマヒ}茶^{ハシマヒ}の店^{ハシマヒ}常^{ハシマヒ}ふ

清見^{ハシマヒ}浦^{ハシマヒ}越^{ハシマヒ}頭^{ハシマヒ}賈^{ハシマヒ}ム其外^{ハシマヒ}奥^{ハシマヒ}の店^{ハシマヒ}多^{ハシマヒ}一^{ハシマヒ}浦^{ハシマヒ}のみ^{ハシマヒ}波^{ハシマヒ}め

まほ

たとふものありと見る所る月を拂ひて浦乃波^{イシガ}セ

大藏文有事

清見鷗^{シエイガ}今れ清見浦^カ。——属^{シテ}

新古今 以^シ會^シ鳥^{トリ}水^{ミズ}又傾^{シカニ}也 離也

徒一位家隆
泰謹推詮

日

尼^ニの僧^{シヨウ}あよ清見^カと御^{ミサハ}せ死^{スル}り^タ波^ハの^シよひ^シ海

風雅

清見^カの波^ハを^{シカニ}たび衣^{アヒ}ま^シや^シの月^ツと^モて^シる

新拾^{シキ}

千首^{チヒロ}清見^カの波^ハを^{シカニ}たび衣^{アヒ}ま^シや^シの月^ツと^モて^シる

月桂

清見^カの波^ハを^{シカニ}たび衣^{アヒ}ま^シや^シの月^ツと^モて^シる

新拾^{シキ}

十五首^{チホ}清見^カの波^ハを^{シカニ}たび衣^{アヒ}ま^シや^シの月^ツと^モて^シる

若

清見^カの波^ハを^{シカニ}たび衣^{アヒ}ま^シや^シの月^ツと^モて^シる

新拾^{シキ}

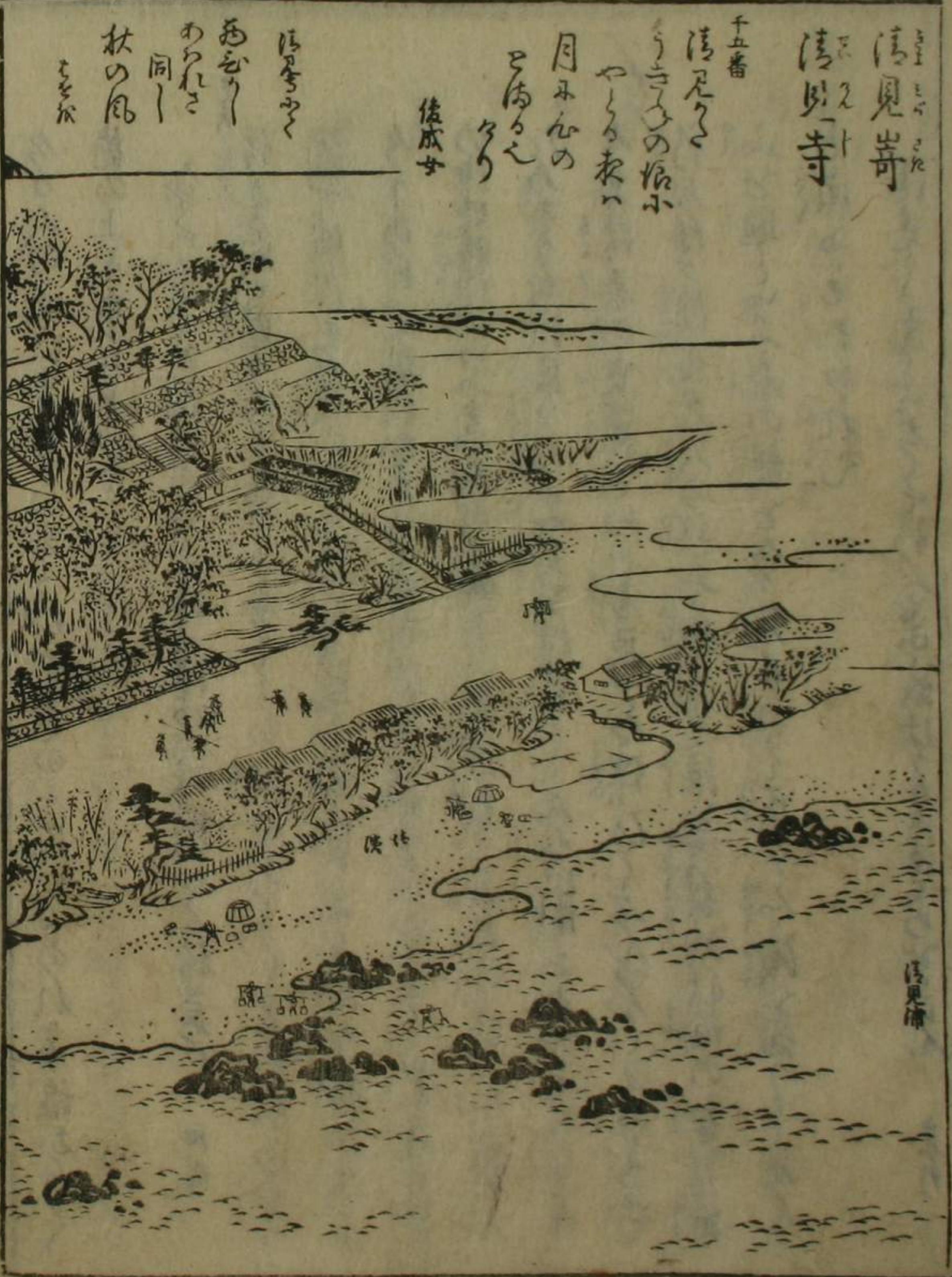
千首^{チヒロ}清見^カの波^ハを^{シカニ}たび衣^{アヒ}ま^シや^シの月^ツと^モて^シる

月桂

清見^カの波^ハを^{シカニ}たび衣^{アヒ}ま^シや^シの月^ツと^モて^シる

新拾^{シキ}

千首^{チヒロ}清見^カの波^ハを^{シカニ}たび衣^{アヒ}ま^シや^シの月^ツと^モて^シる



巨鬱山清見國禪寺求正院

宇多郡鷹津清見禪寺の樹がある俗に鷹見寺と云ふ

庄像長三尺客殿小安代高山山ふへとえ名宗をう

本尊正觀寺

慶長年中今宗とある

永世孝享

客殿様側の狹間へ掲げ額に諸佛宅

上と洞房小屋の額に朝鮮人青螺山人書

方風不斬駒山

猿人裔孫延翼の筆

客殿ふらう職

寺

足利尊氏公像

猿人求正院大洋尚公大居士又山中ふは廣ひ
は見浦の渕人丈餘の緒と渕に則深きゆく然んと山中ふは高
い價とあらう紫袍れ法衣は瘦けり人を急難に處
をうり立たと施ちゆく海面へ敵をうる海見寺の長者
多く施け和尚を瓦軒の人にふあくに菩薩の化現として敗戦の西
小なり爲小化れつて亦小至る施女の住むる跡も此所ふありたり
護國禪師像今川義えの伯父也聖齊長老と号す

客殿畫

獅子二牡冊將望探幽系

向山堂

山向基闘聖禪師の像が安置
はは禪師は瘦け和尚といふひうへ
るゆい價とあらう紫袍れ法衣は瘦けり人を急難に處
をうり立たと施ちゆく海面へ敵をうる海見寺の長者
多く施け和尚を瓦軒の人にふあくに菩薩の化現として敗戦の西
小なり爲小化れつて亦小至る施女の住むる跡も此所ふありたり
護國禪師像今川義えの伯父也聖齊長老と号す

自覺聖智禪師像

山中安便

龍虎兩軸

書院小揭神の物し立のえ

衡立画

表紙紅葉

石浮屠一基

原のあら山梨氏の碑文累記

羅樹ト白鶯雙標

同一基

高寺門あふり鑄云處山一居土慶安ニ己丑年
國田中清左衛門尉長世云

寺僧云

は人の原合観の時石田光成破捕

人

支此禪刹

セムノリ世名高く號せ江海渺々と月禪心と照

後山嶺巍々

啼も絶聲小和一祖堂の四君樹は朝鮮

木小

て四時小花次第其花形毎年小変れるゆれば名のり卧龍

梅の客殿のあふあうて枝の漏れ丈餘尺其側小曲綠梅あり早春の

頃匂ひ芬々

て羅浮の夢小名芳々と拂ともくさらば

嘉陽公主姫あり書院乃庭中

あひた後あ落り飛泉りうされと九曲

泉とあく在のあれ半石虎石龜石其形ふようく招毛乞寶

圓初將軍家は鑿奥清見を聞れ兵器四品あり頭机子棒銃眉

尖刀毛乞寶

井ねね女が酒蔵樓も庫裡はあふう門あひ則東海道かへて旅

く卿相の去客萬圍れ諸侯多く此寺に駕ひ停く詩を賦一歌を

もとより茶店さてんあ裁きのみを漫漫まんまんて汐汲しおく汐應しおう竈竈とうとう
よと寂々ひとりごとく風流ふうりゅうくまへ金かなくら月つきな名なまあ爲あつめーと須
磨赤石あかいしやと又びまたうる務邑むいく謝莊せうじょうグ月の賦ふ白玉爲しろぎ空うつふ曇くも
素そ月つきえふ流ながれと賛さんせーとばくらの半はんかづ

清見寺十境

清音閣

山門

當山十一世閻恢和尚稿

岐嶠きしゆ將軍石じょぐんいし在山峯さんぼう
連慢卷れんまん諸天鐘鼓傍はなわ波沈鶴邊聲落おち應真おうしん錫霜せきそう
投簪とうしん將軍石じょぐんいし在山峯さんぼう
尊公陣跡そんぐんじんせき古名存こみょうぞん新雀唳しんくわい灘西たんせい
三十萬天扶漢運さんじゅうまことん五千人鼓鼙聲合磬城きよきゆう浪旌なげぢやう
旆色迷櫻野ひれいろめいりんや昔將軍茲所こゝ憩老松風雨簷きよりおう
秦せん嶠さき清淨觀せいじょうくわん
海邊花木五雲興かいへん櫻さくら在補陀岸上憑風靜ひよひらがはらじょう潮音しおおと
隨梵唄まいはん天昏樹色掛龍燈まぶたん瑞池正佩空中響たまいけいくう銀音ぎんおと
漢仙槎かんせん月裡昇つきのうち坐想人間難ざわん可到鼇峯かくほう鐘磬度きよくど
嶠增さき分境亭ぶんきょうてい在山峯さんぼう
絕頂樓閣霄漢間ぜきとうるこう清秋此日一堪攀洲かんぱん前暮色まくいろ
分境亭ぶんきょうてい在山峯さんぼう
樓閣霄漢間うこう清秋此日一堪攀洲かんぱん前暮色まくいろ

三峯さんぽう雪樹抄人せつじゅ家四水灣引雨總分龍爪りゆう根交
詎閑けいかん波欲動鷺頭山雄風須賦披衿客不是蘭臺興
利生塔客殿西云北塔瓈きは
神竊利生塔客殿西云北塔瓈きは
平楚蒼然浮海潮中存古廟晝蕭羽衣松掛
霞色鴨浦波連烏鵲橋日暖千帆如雪點雲
飛霞面似山朝夕陽一半漁村晚天樂時聞月
神竊利生塔客殿西云北塔瓈きは
相是真空湧出瑠璃界塔標落海中攀梯過鳥道卷幔倚
龍宮咫尺天城雪烟霞巴水東勝因隨所化色
芭蕉腰亭子藤蘿橫沙月餘霞當日山原眺詩瘦早
地無煩敵還驛樹橫沙月餘霞當日山原眺詩瘦早
晚此占闐さん攬還驛樹橫沙月餘霞當日山原眺詩瘦早
鴉影橫沙晚淚痕袖浦濤蘆花連斥鹵紅樹照
并擣縫袍皇江白風頭促月低舟楫高妻其多旅思砧
并擣縫袍皇江白風頭促月低舟楫高妻其多旅思砧
三保從西出正東田子洲江雲分駿豆巖雪照

春
春曙
詠古

人謳

春秋山向五原起波連七澤流漁樵風化在猶
今日の清見寺に尊輿ひそめゆき去れ波靜小むひふニ保の
ねふとく渡りあとの景へもさうあり

浦風のツルもとてばほひはみ波ちくのね原
悪詩をじくらめとよとなほせんれが生すれてわ頬に
絶妙新詩聽更佳推儲酬和隔天涯
芳聲驚世京花客嘯月吟風伸雅懷
がくつる波安へやして脚筋小めをあふ何くる脚物語りとあり
帝典の發句ばかりきりれとあれも

月よりうたひよまれ名清見と

送芳

うき滿くかよすとあき店子せびひてこもろきて脚旅

名あらく今宵の月波はるよ波をくす度とも

は紀利ハ寛永十二年の以ニ條殿の左相府若公烏丸亞相光度卿
かはりの侍使小吉妻(御さゆひ)紀利と妻のうわばのとづからく)

四ノ五十七

丙辰紀利

清見閣を延曆頃奥州の逆賊高九駿の圍まで攻合の閣小陣

とりと坂上將軍討破りて高九奥退一半々をれを誇りし傳(傳)

ば所寺のり萬す惠日岩尔長老(聖一)の才子開聖のちとひくさ

清見等と名はり又ハ巨鰲もつり近頃沙心寺に屬すと小安へ仰

經歷巨鰲山入門心自開禪徒今住寺

羅山

經歴巨鰲山入門心自開禪徒今住寺

昔攻レ閑三保窓櫻裏大洋机案間

羅山

起鞭征馬去斜日照人顔

貞應海道記

清見閣は西南にそと海を高低の水路をなまく東北

を山と儀せ峻難同ドく足の傍まづ磐石の下に波の花風ふかく妻の

さざえあく姿れりかねの邊みぞれに舍く姓姓もそれば深丈の波の去と打

キ月のみね矣當て漕沈陸地の磐石の道みて風の使御わーと小吹

てもく名はゆるあるかにとも興云際を耳ふ徳の所あらそく

因みけらば耳因乃感をきくにゆく骨の此浦小あり浪ふ洗てぬ風く

西小道波三とね風を一くあるかに柳ふかくミを引れば棹を爰に

石あり開無のをふ布たこと所ありむう開ちの布次つゝう
猿りくあら不取りくはと聞ゆ

吹き參らまう風見のをもド神ふりの風也

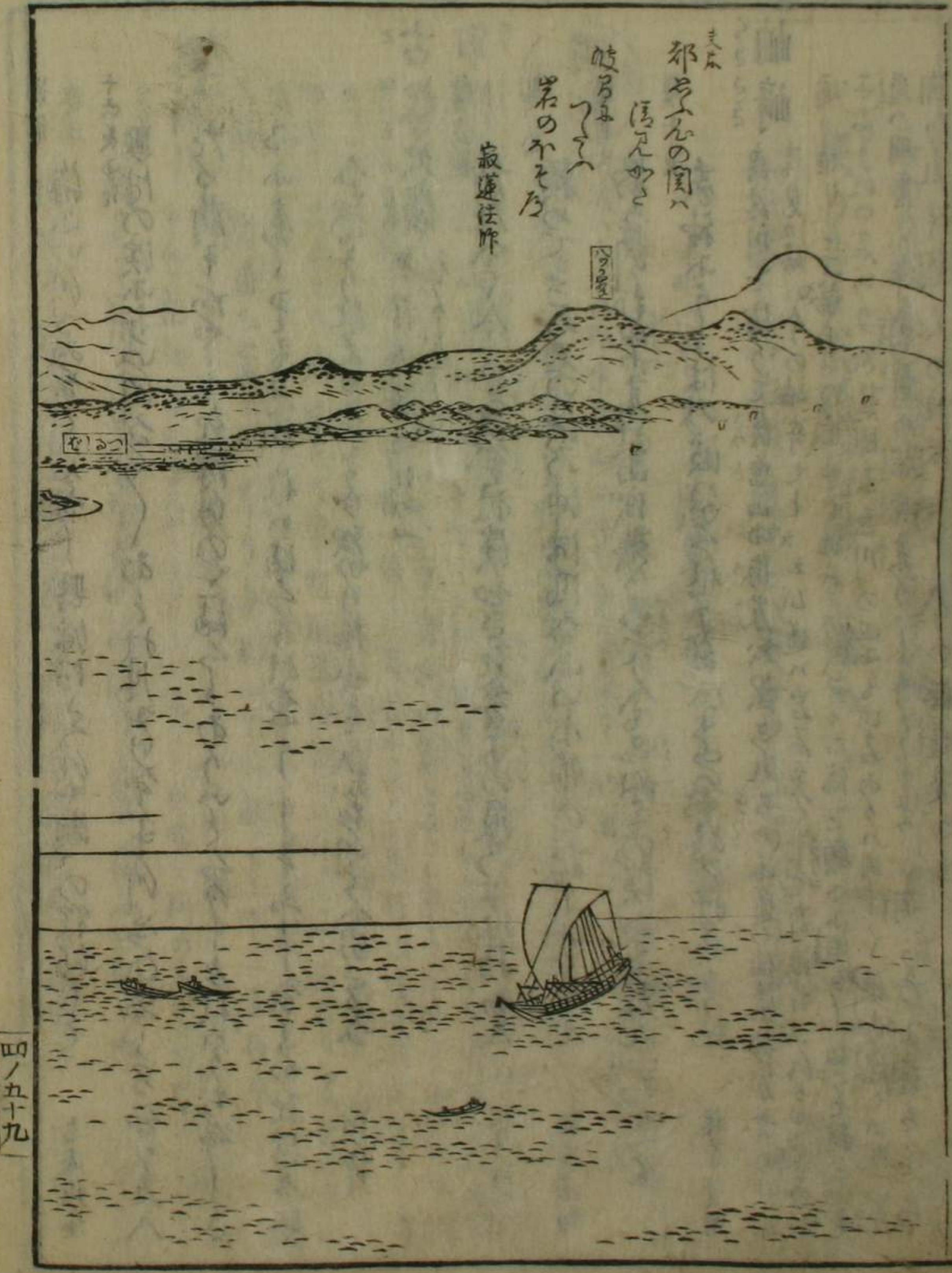
吹き參らまう風見のをもド神ふりの風也

興津

和名鈔小息津と書れ或ひ奥は又ハ仲はとて書り由井ナミ御里拾木町
道ハ山水の風景真めやして東海道第一の勝地へ名を有し津海さ
甲州身延山道 身延山の奥津海さ
河馬本
あ江内に篠の小ちう紀岩松のけね浪山と社をねれたり 聰毛竹
急一月連上人真骨寶塔へ傍 奥院まで五拾町山道小諸堂多一奥
院より赤坂村まで五十町赤坂より集氣川と海り七面山一花表ゆて北
門餘一花表より神前まで六十町坂路嶮岨て又は内より宿毛の山
西水岩瀬より八万坂まで六里餘て万坂立入り身延山まで都ノ一里
小向一花表より浦道へ富士川入り身延山まで都ノ一里
奥津海 駿の東ふあら又浦田川とも又は川傾て初夏より中秋の夜
まで船漁舟半多タ一至く英歩一川の先小女旅客や天保の
ま木 津見二月不むくかとまの山海を經て海みづらん
國玉 波見るくぬまづ陰小駒三とて奥津海ふもぢ一原さん 法親王

海小い河さみをひあら、興はの海小い河さみの海ゆて
十六夜
興はの海小い河さみ、あと四月せりぞま川をひめうるかま入
たる所平ひやーれはのとほくすあらじくすれひうちゆーと
ふ事くともえられば海くすれをうトキよーかくひだはり
を紙きうに見るめどうりひがり松垂をひかれとふせふ
古奴矣演 烏タガ

岫崎 舟見カ峠へ今ハ岫崎と云ふ山の海岸なりふれ古の海道も仙覺抄万葉の註小
通り難いと云ふ事の道也くゆきのくよふ筋と顧る小眼うねこそ難と云
道ハ明暦元年朝鮮の信使來り一時下りたまく海へ上道を企
聞づれ族人の難い助く今之の海道是あり



奥津川



倭文載
清見之
波の園
のうじえ
因長見とく
浪うきとく

從都成局

四ノ六十

光外記
かみの岸といふある荒島乃岩れをもぬれりての後小を經風といふ
ちとほ浪をまくわざれりてひとひ通つむまむ能にてはも
まもまの神のさがくまでいかけくも四のまつー半ひのをせがくゑ
うちかう先に種せばいとひかそー

なまの風をひく後の岩はもひ浪つけ夜ぬゑと極く 光外

支本 新波撰
波の岸へだれが寄ようちあくめうひともとての風のよまと

瑞川院中宮

上愁

葉を中云 清見がく海風をひよまくへとひもゆきの浪の園のり 院大納言

典侍

波の岸ちとや々今はまく久岐賀湯との所をやへとけ通を通の名に

お海みちねれをゆめれんをゆりく女波男波とおきて小浪よまく

附りかひのゆく小浪の園ちとも浪の園戸ともやらる

奥津海道記

岫寄といふや風觀をと翻りく波浪をとうすれ人と
一さる行客つみまのまくとあべくよせ行浪を放うがひてあたを
通るあても嶺岳の下と岩氣をまほと一のぎり右の幽きる浪のう

通るあても嶺岳の下と岩氣をまほと一のぎり右の幽きる浪のう

の我先を取る事なへ一ちるくと甚くはせふ大和田浦を來りて小舟
北仲中小舟よるひりる。帆帆飛く万里風便とたのみて白煙入鼈
波うよれくみまタ陽波あくひく紅藍原とむ海盤のうちかば所
あめこをと身はばさざるに

ワレドロボ波の面見立とひくもくもくとびれをわらの瀬

豊臣秀吉公召後の中
袖師浦 風土記云烏度瀬より東方袖師浦と號し又或云袖師浦ハ
袖師浦江尾より模次契すと號りて又袖師浦と云ふ今之御村
山之御師浦ハ古派字也と云ふ者出焉が傳り
磐城山 今之御坂山以右少々今之上道往還へりと云ふ
古派多

万葉 船城山直越來益磯寄乃許奴美乃濱尔吉立將待

新六帖 佐れまひのそをの候の志を波せむとあらぬむちもえ

夜坐内大臣
家集

船城山あえくせきの川の後條の名の候れ秋のよう月

源氏真
白居易

薩摩嶺 葛籠坂牛房 枝山神平 岩城武野屋
葛籠坂牛房 枝山神平 岩城武野屋
葛籠坂牛房 枝山神平 岩城武野屋

山の名の岩木も衣を波せみが月代あらそ秋風

源氏真
白居易

家集 山の名の岩木も衣を波せみが月代あらそ秋風

源氏真
白居易

袍をふ女房をゆん 来の海

九裡

被れば嶺の絶京ふ一あまの河東の方や富士の高根自妙ふ一て財ある
者あゆ一外の方小愛鷹山已の方や伊豆の岬西の方や二保の
たるみの岸ふくつづて赤の江海渺然として長閑き去の波うふ
鮑うる海士紫螺狹漁夫夏うじ傍邊の蜃夜ふくらむ初馬の匂

新々雲と多の中に消く浦の答御れ秋の夕づれふる爲汝傷——
波ふむれかう小夜をもれすとふく氷としゆるを月かけひや寒——
あり無——観應の仄からよ足利のねひ山小戦の直義の——利
き——て數十萬騎の兵一時ふ躉——れ討ふのうて三里のわざに修羅
道の巷とありく叢腥く尸々路と煙——とを平起小も署——ふあれを
薩摩山の合戦とく甚中下書——櫻葉もく山嶽さとく又小田原小糸と
甲斐の武田と争ひ——も山嶽を仰薩摩巔の崔嵬たるもの——
閑れ要匪取りと云傳へ——も宣和くん今の方平と凱——聖代うきよ
干戈れを承く絶く礼樂と變——貴と多く徳を承く足踏躡——てゐの
風色以賞ト歎よと持つくりあひ行人も多く——とせあづれあふ
名產榮螺鮑——
河内蒲原

豊積神社(卷原郡明智屋原村小あり延喜式肉)

祭神木花開耶拝命

社規云

天成天皇御宇勸信其後大

由井

駿河由井

賀燒

由井濱

輕風湯井喫ノハ掉漁船借問莫膠鬲無情鹽竈煙

山崎間齊

蒲原古城

河内蒲原の西向田村の左方あり水深中

小田原小糸新二房繼重

秀範多日調防守長宗荒川豊前ち因清を籠り——永保十二年

十一月六日武田信玄大軍少く押上也家に吉田左近が兼宣落合

市之丞初唐傳右衛門等一番小城小乘込戰ひ——北条方利あつて

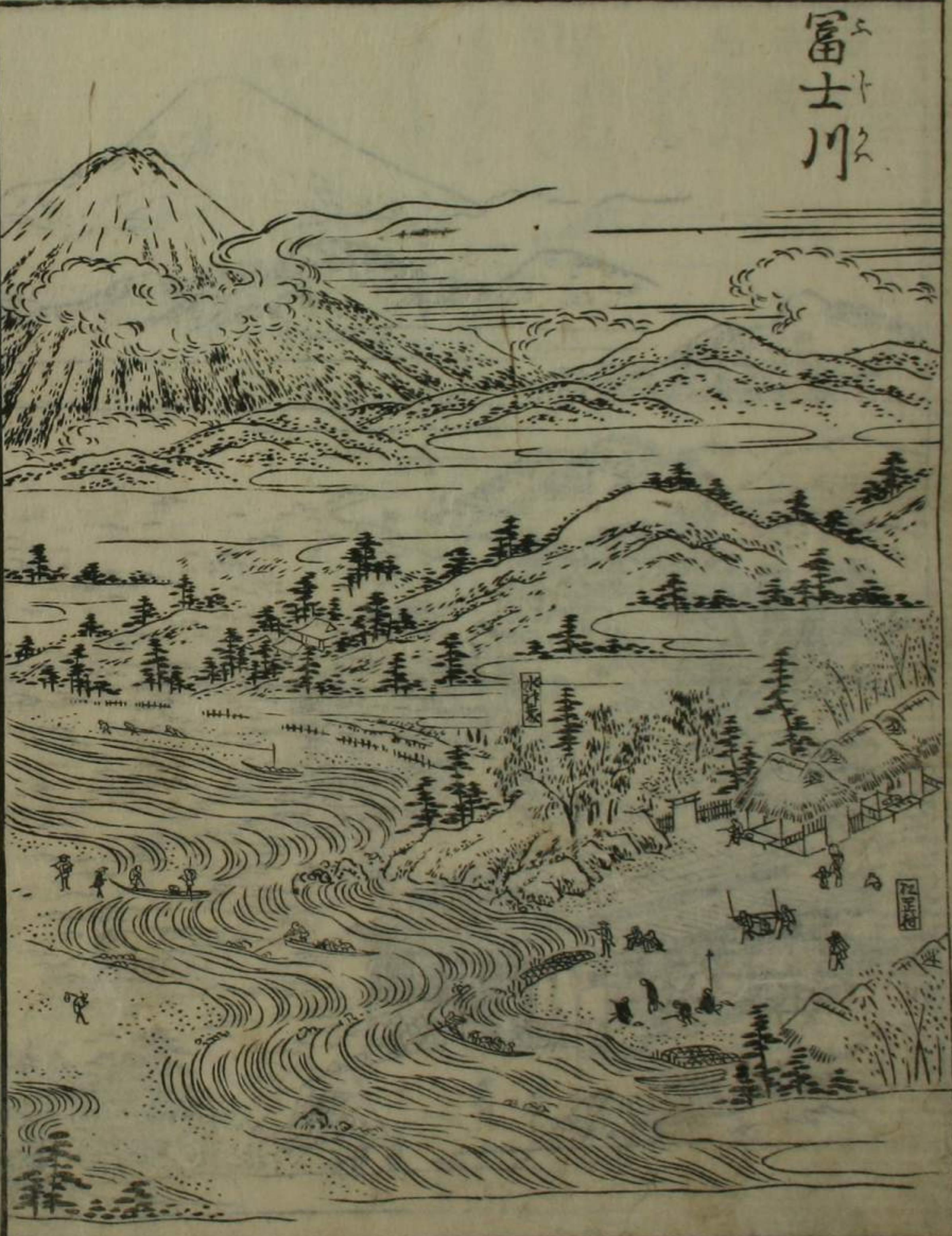
救千駿討れ終小彦城——

神原も書ひ吉原ヲ武里三十町富士川まで三里八町(馬場東立場)

ス右の方小吹上テの段とつあり小屋木あり土人深義經破水と云
里處日ひは姫次郎の宿たり利根と號慕——陸奥一ト
時うふ到モ渡れ——里人隣——葬り塚の木小ねと——甚
至う天正の下小野於通とづる風流の妓女海藏宿の生涯の
半と書ほ——十二度——廢帝とづる傀儡師小ど——へく篇を
つれ音——せぐも是海藏の中也——於通を真田氏少く豊太閤を
仰ひ——とぞ



富士川



一四六十四

ほくと
みだり
みの秋
駿府文母



駿陽
張安画

富士川

駿河富士郡ふみの取締ふみの内て名とん日平紀松塗保と書く
お源の信州八ヶ嶺より流れ甲州ふ到づ諸流會して太郎とある
お海ふ淀く道中おの轟流山の幅あひの源減すりて際限量すを
お流お船ワツリ備木やく船とゆりこ
便古今

舟よも富士の川底に日々音ね波すわきを深浮ぐ原

かれてもさひへあと船ド川のうき風すてそもく風え

朝日うへたむれみ音を曉てたちもあまねくト乃川旁

新後撰
雨ちうく高根ひをふらうれて山ともの風ううのる森

支本
深浮ふ竹のうはなすをとよのかくらの川波

家集
夏もとちの水れあられへ富士乃川をせきよし化され

日
吹お病焉者とそれを白ぬふまことれかくうのる風

東應海之記
浦原立はるふりば若海ふきことせん川賓や馬ふあひ源のふ

山の音のとふわくび川の底の水れあらぬもよくかくわき

者ふ笑へやうき山のうとうとてあくはく富士川のあ

本紀引
船めくは里波牛川富士川の水深れをと浦原までとくくひ

さくくさのとあくへ安曇川と流りてと又川水れみとふきりれぬと

ひきせーされと富士の根とまのまれまに見せらが今敷方町はあやうくん

あふ日ひくひくの漕出くもあく高根といはくと海つあづじ富士乃

川舟十一日崩れ爲るうへあく勢ぢれりあく川まくぬうへあれば

富士川のうへすもあはれそれな高根を要あづり

本泉高根
泰國小名と傳る大山あきこられとよと吉里川の海道の轟流也

舟ふ奈くはくお海へちちくはゆへて竿と一橹を押出はせ

尼の山と危うく死ひ難ひの間まひ魂乃消る者一ふたり

往來停馬此踟蹰天下滔々豈獨占口

羅山

水神森富士川右の山陵。あり巖上小松柏生茂れむ川筋

れ表河中北源とある事ナリ。其のあらう人の水難沈没して重病

八十年から長堤と水神の巖小築つけば已後水筋走りて法

水の時々堤の内かく流水破流へてあり難き。甚も云為

土人持袋堤とひがへり冬

富士川古蹟丙辰紀行小平氏の羽毛小驚く逃去へ富士宿の半を

今之若狭小豆其地小平家城と云所あり治承の亂の遺跡也

東鑑云治承四年十月九日記支賀嶋給又左少將惟盛薩摩守忠度參河守知

度等陣干富士河西岸而及半更武田太郎信義

廻兵畠潛襲一件陣後一面之處所集千富士沿

之水鳥等群立其羽音偏成士

氏等驚騒爰次將上總介忠清等相談云

士率悉属前武衛吉等愁出

遁圍速令歸洛可攝謀於外

武衛令到駿河國

守忠度參河守知

度等陣干富士河西岸而及半更武田太郎信義

廻兵畠潛襲一件陣後一面之處所集千富士沿

之水鳥等群立其羽音偏成士

氏等驚騒爰次將上總介忠清等相談云

士率悉属前武衛吉等愁出

遁圍速令歸洛可攝謀於外

平家お君云去後右京房佐處謀叛の如く夙夜一バ福原の公卿金様

四六六

有て今一月も勢付ぬさむ不素きはゆるべからて大軍小松
権亮少將維盛副のふい薩摩ちたて侍大將お上總守た清次先手
にて都合三萬餘騎治承四年九月十八日新都城立て賄百十九日より舊
都不省一同北日東園へ移され十中略十月十六日少將駿河園
清見園ふぞ看立都とひま餘騎て歩てとも路次北兵付副七馬
餘騎と我立へて前陣ハ蒲原富士川小進と後陣ハまごの城守津
の屋小支たり中略大將軍維盛東園の案内有て長井齊藤別當實
盛次らて海往れ強弓射れ桂東八箇園ひにあはざと向ひハ安
安別高朝多く君の實ひ盛弘大幕とぞられひをせ僅十二東派仕進
の准度うれ強弓健矢者ひひとて張作參ひ桂兵若ひ射作ひ傳
美盛往射箭八箇園ひに參ひとて長井齊藤別當實
二三兩の客易ひげ射徹ひ太名と申象の者五百騎小者て持
惟ひ馬ひ素ひと落ひ道ひとくに惡所ひと馳ひと馬ひ倒ひされ軍ひ又

親も討れよも付れよ死れハキシテ戦ひに西國の軍と申ハ惣て
其儀ハナビレ親討れよも引退ニ併事孝義一王而て寄ふ討り
モハ其悲歎モトモ仕ひに兵糧未盡ねど來タ田舎ク秋刈刈收先
て寄せ夏ハ塾ノトと獻ひ多ヒ奉トと婦ヒに東國の軍ハ凡て其儀ハ
佐リテ其上甲斐信濃源氏考案内ハアリ富士河祐ヒテ搦シ之
廻リハざくんサキナ申セば大將軍は御心ハ騰セテ勢萬人をも申セマ
思ひれらんを候エハ惟ツビ但軍ハ勢多シより申セバ大將軍は策ハ
あるとこそ申侍ヘヒトヨクレバ是故聞兵共皆主し標ミ取りタリ去往ハ
同ニ二十四日卯外の奉富士川かく源氏の冬合と申セテ二千三百れ兵小
入々平家は兵とも源氏の陣と見渡せば伊豆駿島の人民百姓等が軍小出セ
處ハ野ふ入り山や疊れ或ハ舟小取奈ハ海の小瀬ひする營村大見ハタチ放あみ
縣一と源氏の陣れ遠火の多シよ實小野も山も海も山も先武者ぐく有
タリとせんと我らまされタ甚夜の後半計富士の沼小柴等も有る水多シ

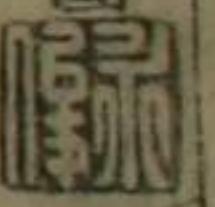
もがくゆうの聲驚きたりと立ち羽毛羽笛大風等の擇小聞け
れバ平家の兵とも源氏の大勢の向ふたりハ勝リ妙反別高ウヤは強小甲斐
信濃の源氏等富士の裾掛テう搦シヘ廻リ惟ラん歎仰十萬人有ヒル
取義つれてハ叶キト寔とは居く尾張の洲保が防げゆそ取ぬもろ
敢ヒ我先キふくさぞ崩行タ能リ小周章嘆く弓取者ハ矢ともアヒ
箭立者ハ弓ともアヒ駒馬から人馬ア人の馬ゆハ我奈繫タク馬小馳て馳
れハ株ハ躰る車腹もハ其乞ニ近き宿もトス君邊サモトニ集セ
廻ヒ酒盤一タラク頭ハ跋被られ歟ハ後踏折られく喚き叫ハ車
駄一 同ニ二十四日卯外の奉小源氏二十萬騎富士川の押寄て天も響紀
大旗も颶ぐ計小國城をニ箇及候テタる平家の方ゆベ定ヒテ吉良公
八く見それが皆と連坐候トナヒ故の志る鎧取て參者もアヒ
平家は捨棄たる大幕をテ帰る者もアリ凡求永の陣より蠅アブハ
居トナヒ兵備佐辰也ニ馬もア本甲が脱手水鶴銅取テ王威の方



四六八



狩野経殿助藤原承俊圖



ふ
トスのう
富士川水鳥
かみをみけのまえと
去ま家太軍

伏見より全賴朝が私の高名小非に偏ふ八幡大菩薩の御計もとを宣ひ
タリ。廳くち取所されども駿河國とは一條次房忠頼遠江國をへ安田
二郎三郎定小領らう猶も續く責めづくとも後も流石覺まう
そく駿河國より鎌倉へき歸られタリ。首ふ

富士川の領々の若こひあどももあら伊勢平氏。

丙辰
相國の御前で平家お伝の奉ありふ平氏水弓の羽毛ふ驚て逃
去一の富士沼の奉かて今け若徳寺ハモ所へ齊藤別當が東國小莊兵
多キ半兵詔りふとうて平處は立ども臆病神のはまつゆのゆくあら
御前ふ候く某御宿下て辨士法にて故の美を説せし事多れ無能小

らるは是じと化せたる事も只今の授ふ玉者耳ふぞすりて覺へむ

闘國中分源興平東方氣勢盡豪英

羅山

曾我兄弟充倉勝とひ今も款封の旨信ぞ不盡應ありとゞ甚側人次よラホ
温泉寺の有りあるふるを知り者の方信あり若古く文宗御歎一叶又付
脾あり十郎祐成と高崇院殿峯巖良教とひみ房時宗鷹岳院富士山

四六九

賤富とアリヒトヒテシテアリ彼勢う節とひみ房の斬られ一
首洗水首脳あらどあり拠建久四年五月廿八日和泉守兼足富士の御
宿の旅館井出の面承小椎泰一又の款工友左衛門尉祐経公討を難
直店の侍八十餘人を切モ三百八十餘人ふも公買セクル祐経ハ仁田四房
忠常ハ討れ時宗モ五房丸小生捕らう頃朝々直ふ子細公安一石
て寛にの御心ありとゞも祐経が妙引頻ふ籠申やドリ終小恭也
又はやくふ虎部翁の恭倉もあり祐成祐死の後承あ廢して御公
弔ひみくまく空一くろとあん云傳へ作る

曾我物語云

ユ高左衛門尉祐経益明の酒ふ醉ぬれば款の入るをもあざむけてか後も

あらずて御うなづ千房松明傍まで益施ふまづうれが御内佈ヤモラアリ

タリ多數の御將遠齋をとひ御人の遊君同ト席あらうれを緒うの多

さふ幸モセアリませ人公の祐経と申ふ至て各自と因まく合うちうかづくに於び

タリ我を表とある二年か一役を候案する西王母御園の御優曇華うもらげ

らすそれお詫びすれども欲されば早く斬れやとく人の大方派祐経も當て引

てかれて七八度あふたり更のく時宗は年月のせひ只一本力ゆく

そひはうと死服れうと十房まで替へ度へくる者孤切久先人と斬ふ

同一起さんをの方れ切先人と祐経うとお務焉てお何の左衛門殿か見

か入原多良秋の肩をまとう我ち様の歎を持てりとてお解外身を起すや
被絆風と起れて少澤どう行役の革ひどきと云も思ひ起るお松元ふさる

左力欲をうんとすゝ所と優へき歎の振舞はとおほふうかの肩とうなされ
脇の下板あそても通れとあわせに切付されみがも澤とうや鷹と氣畜て
豫の上ひ波多上て要板あ切通一一下役までや切入らるも理あら源氏重

代の友切をひとのうなまぐさあくほぐく折る一初勿かうり預け一も是

ぞめ一を念拂へ時おもれやみあてゆのゆくく至刀づみを斬とうれ云

古家川吉原の西ふあり和名鉢古家郷あり土人船く海川とよ

二度橋富士川の支流ふく店舗古よりあり

猿間神社高鷲の山際々舎庄あり延喜式内又三代實源後正三位初代富士山

後後撰四月廿日よりの社より舊のとく

あくねの花の咲くひやて終附あくね山櫻法印隆安

新勅撰もるかのふーの宮ゆくよみ作

卓振神代の月れをねれをみて川もあくねう

平泰時

東海道名所圖會卷之四

畢

中華書局影印

龍山詩集